

いき　め　こ　ふん　ぐん
生目古墳群 VII

一生目 1・2・24・25・26号墳発掘調査報告書一



2018

宮崎市教育委員会

いき　め　こ　ふん　ぐん
生目古墳群 VII

—生目1・2・24・25・26号墳発掘調査報告書—

2018

宮崎市教育委員会



生目 1 号墳 I 調査区 2 段目斜面から 3 段目斜面葺石検出状況



生目 1 号墳 | 調査区 3 段目斜面波状葺石検出状況（斜面上方から）



生目 1 号墳 | 調査区 3 段目斜面波状葺石詳細

序

総数 50 基からなる生目古墳群は、3 基の 100 m を超える規模の前方後円墳を有する、南九州でも屈指の古墳群です。平成 10 年度から史跡整備事業として、発掘調査、整備工事を継続しておこない、平成 20 年度に史跡公園が開園、平成 21 年度には公園隣接地に生目古墳群のガイダンス施設も含めた複合施設である生目の杜遊古館が開館しました。

公園開園後も、整備事業を継続し、変化する史跡公園として、新たな発掘調査成果の発信や史跡公園として充実した整備をおこなっているところです。

本書は、平成 25 年度から平成 29 年度に発掘調査をおこなった、生目 1 号墳、2 号墳、24 号墳、25 号墳、26 号墳の報告書です。

生目 1 号墳は、100 m を超える規模をもつ前方後円墳の 1 基であり、発掘調査によって、古墳の表面を覆う「葺石」が非常に良好な状態で残っていることが明らかになりました。特に、平成 25 年度、平成 26 年度の後円部の調査では、まさに「造られた当時のままの姿」といっても過言ではない状態で発見され、新聞やテレビなどでも大きく報道されました。また、その葺石の積み上げ方が、全国でも他に例のない、小さな波が連続するような独自の積み上げ方をしていましたから、さらに注目されることになりました。

今後は発掘調査で得られた成果を基に、貴重な文化財として保存されると共に、多くの皆様に歴史学習の場として、憩いの場として活用いただけるよう整備を進め参りたいと思います。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご協力いただきました関係機関の皆様、ご指導、ご助言をいただきました諸先生方、古墳を大切に守り伝えて下さっている地域の皆様、そして発掘調査、整理作業に従事していただきました作業員の皆様に、心より感謝申し上げます。

平成 30 年 3 月

宮崎市教育委員会

教育長 二 見 俊 一

例　言

1. 本書は史跡生目古墳群保存整備事業に伴い宮崎市教育委員会が平成 25～29 年度に実施した
生目 1 号墳、2 号墳、24～26 号墳の発掘調査報告書である。

2. 生目古墳群史跡公園整備専門委員会

委員長 西谷 正（宗像市郷土文化学習交流館 海の道 むなかた館長）

委員 石野博信（兵庫県立考古博物館名誉館長）

一瀬和夫（京都橘大学教授）平成 28 年度から

北川義男（元南九州大学教授）

白石太一郎（大阪府立近つ飛鳥博物館長）平成 27 年度まで

高瀬要一（元独立行政法人奈良文化財研究所文化遺産長）

北郷泰道（官崎県教育庁文化財課専門主幹）

柳沢一男（官崎大学名誉教授）

整備指導 文化庁記念物課

宮崎県教育庁文化財課

3. 調査組織

調査主体 宮崎市教育委員会

発掘調査

〈平成 25 年度〉

調査総括 文化財課長 橋口 一也

副文化財課係長 島田 正浩

整備担当 副主任幹 森田 浩史

調査事務主任 事芝 優美

調査担当主任 技師 石村 友規

嘱託員 渕内美智子

〈平成 26 年度〉

調査総括 文化財課長 橋口 一也

副文化財課係長 島田 正浩

整備担当 副主任幹 川越 健

調査事務主任 事芝 優美

調査担当主任 技師 石村 友規

嘱託員 渕内美智子

〈平成 27 年度〉

調査総括 文化財課長 日高 貞幸

埋蔵文化財係長 井田 篤

調査事務主任 主事 谷口 広清

整備調査担当主任 技師 石村 友規

嘱託員 渕内美智子

〈平成 28 年度〉

調査総括 文化財課長 日高 貞幸

埋蔵文化財係長 井田 篤

調査事務主任 主事 東元 慎吾

整備調査担当主任 技師 石村 友規

嘱託員 白上いづみ

発掘調査・報告書作成

（平成 29 年度）

調査総括 文化財課長 羽木本光男

副主幹兼文化財係長 井田 篤

調査事務主任主事 東元 慎吾

調査整理担当主任技師 石村 友規

嘱託員 大嶋 昭海

整理担当嘱託員 小牟田智子

4. 掲載した現場図面の実測及び現場写真の撮影は、石村、渕内、白上、大嶋が分担しておこなった。
5. 掲載した図面の製図、図版作成は石村、渕内、小牟田が、遺物の写真撮影は石村がおこなった。
6. 本書の執筆、編集は石村がおこなった。
7. 本書で使用する 3 号墳、5 号墳、7 号墳、14 号墳、22 号墳、23 号墳及びその周辺の測量図は宮崎大学考古学研究室が作成し、それ以外の古墳及びその周辺部の測量図は宮崎市教育委員会が作成した。
8. 本書の図で使用する方位記号はすべて真北を示す。
9. 1 号墳の葺石実測は、平成 25 年度は株式会社イビソク、平成 26 ~ 27 年度は有限会社ジバングサーベイに委託し、石村が校正をおこなった。
10. 地中レーダー探査は、宮崎県立西都原考古博物館に依頼し実施した。また、その探査結果に関して、東 憲章 氏からご教示をいただいた。
11. 現地調査及び報告書を作成する過程で次の方々からご教示をいただいた。
青木 敏、犬木 努、梅本 康広、岸本 直文、定森 秀夫、重藤 舞行、宍戸 章、田中 裕介、野島 永、橋本 達也、廣瀬 覚、古瀬 清秀、桃崎 祐輔（50 音順）
12. 出土遺物及び掲載図面、写真等は宮崎市教育委員会で保管している。資料の閲覧・利用等に関しては、事前に宮崎市教育委員会までお問い合わせいただきたい。

本文目次

第Ⅰ章	生目古墳群の概要	
第1節	生目古墳群の地理的環境	1
第2節	生目古墳群の歴史的環境	1
第3節	大淀川下流域の古墳と古墳群	4
第4節	生目古墳群の既往の調査	5
第Ⅱ章	生目1号墳、2号墳、 24号墳、25号墳、26号墳の発掘調査成果	
第1節	調査の経過と概要	9
第2節	生目1号墳の調査成果	11
第3節	生目2号墳の調査成果	85
第4節	生目24号墳、25号墳、 26号墳の調査成果	93
第Ⅲ章	総括	
第1節	生目1号墳の墳丘	109
第2節	生目1号墳の葺石	113
第3節	生目1号墳の位置付け	115

挿図目次

第1図	生目古墳群周辺主要古墳、 古墳群分布図	2
第2図	生目古墳群周辺主要遺跡分布図	3
第3図	生目古墳群主要古墳位置図	6
第4図	基本層序及び調査区配置図	10
第5図	生目1号墳墳丘比較図	11
第6図	生目1号墳既往測量図①	12
第7図	生目1号墳既往測量図②	13
第8図	生目1号墳測量図	14
第9図	生目1号墳A調査区平面図	17-18
第10図	生目1号墳A調査区立面図	19
第11図	生目1号墳A調査区土層断面図	21-22
第12図	生目1号墳A調査区	
	生目56号地下式横穴平面図、立面図	23
第13図	生目1号墳A調査区	
	生目56号地下式横穴墓土層断面図	24
第14図	生目1号墳B調査区平面図	27-28
第15図	生目1号墳B調査区立面図	29-30
第16図	生目1号墳B調査区土層断面図①	31-32
第17図	生目1号墳B調査区土層断面図②	33

第18図	生目1号墳C調査区平面図、 立面図①	35-36
第19図	生目1号墳C調査区平面図、 立面図②	37
第20図	生目1号墳C調査区土層断面図①	38
第21図	生目1号墳C調査区土層断面図②	39
第22図	生目1号墳J調査区平面図、断面図	40
第23図	生目1号墳J調査区立面図	41
第24図	生目1号墳I調査区平面図①	42
第25図	生目1号墳I調査区平面図②	43
第26図	生目1号墳I調査区立面図	45-46
第27図	生目1号墳I調査区土層断面図①	47
第28図	生目1号墳I調査区土層断面図②	48
第29図	生目1号墳I調査区薺研堀土層断面図	49
第30図	生目1号墳M調査区平面図、立面図	51-52
第31図	生目1号墳H調査区平面図	53-54
第32図	生目1号墳H調査区立面図	55-56
第33図	生目1号墳H調査区土層断面図	57
第34図	生目1号墳G調査区平面図	61-62
第35図	生目1号墳G調査区立面図	63
第36図	生目1号墳G調査区西壁上層断面図	64
第37図	生目1号墳G調査区東壁上層断面図	65
第38図	生目1号墳K調査区平面図、立面図、 土層断面図	67-68
第39図	生目1号墳D調査区斜面部平面図、 立面図	71-72
第40図	生目1号墳D調査区土層断面図	73
第41図	生目1号墳D調査区墳頂部平面図、 断面図	74
第42図	生目1号墳E調査区平面図、立面図、 断面図	75-76
第43図	生目1号墳F調査区平面図、断面図	77
第44図	生目1号墳L調査区平面図、断面図	78
第45図	生目1号墳土坑1平面図	78
第46図	生目1号墳出土遺物実測図①	79
第47図	生目1号墳出土遺物実測図②	80
第48図	G P R 探査範囲図	82
第49図	G P R 探査平面図; 329-353cm	82
第50図	G P R 探査3D図	82
第51図	G P R 探査平面図; 385-409cm	82
第52図	G P R 探査平面図	83
第53図	生目2号墳墳丘測量図及び調査区配置図	86
第54図	生目2号墳A調査区平面図	88
第55図	生目2号墳A調査区土層断面図	89

第56図	生目2号墳B調査区平面図	90	写真図版目次
第57図	生目2号墳B調査区土層断面図	91	
第58図	生目2号墳出土遺物実測図	92	
第59図	生目24号墳、25号墳、26号墳 測量図及び調査区配置図	94	
第60図	生目24号墳、25号墳A調査区平面図、 土層断面図及び出土遺物実測図	95-96	
第61図	生目24号墳B調査区平面図、 西壁土層断面図	97	
第62図	生目24号墳C調査区平面図、 南東壁土層断面図	98	
第63図	生目24号墳C調査区遺物出土状況図 及び出土遺物実測図	98	
第64図	生目25号墳B調査区、C調査区平面図、 土層断面図	99-100	
第65図	生目25号墳出土遺物実測図	101	
第66図	生目26号墳A調査区平面図、 南西壁土層断面図	102	
第67図	生目26号墳B調査区平面図、 北西壁土層断面図	103	
第68図	生目26号墳C調査区平面図、 西壁土層断面図	104	
第69図	生目26号墳出土遺物実測図	105	
第70図	表探遺物実測図①	106	
第71図	表探遺物実測図②	107	
第72図	生目1号墳墳丘復元図	111	
第73図	生目1号墳地山盛土境界模式図、 波状葺石模式図	112	
第74図	生目古墳群主要古墳、 主要地下式横穴墓変遷図	115	
図版1	生目1号墳A調査区調査状況	118	
図版2	生目56号地下式横穴墓及び B調査区調査状況	119	
図版3	生目1号墳B調査区、 C調査区調査状況	120	
図版4	生目1号墳D調査区、E調査区、 F調査区調査状況	121	
図版5	生目1号墳G調査区、 H調査区調査状況	122	
図版6	生目1号墳H調査区、 I調査区調査状況	123	
図版7	生目1号墳I調査区、J調査区、 K調査区調査状況	124	
図版8	生目1号墳K調査区、L調査区、 M調査区調査状況	125	
図版9	生目1号墳M調査区調査状況及び 生目1号墳出土遺物	126	
図版10	生目2号墳調査状況及び 生目2号墳出土遺物	127	
図版11	生目24号墳調査状況及び 生目24号墳出土遺物	128	
図版12	生目25号墳調査状況及び 生目25号墳出土遺物	129	
図版13	生目26号墳調査状況及び 生目26号墳出土遺物	130	

表 目 次

第1表	生目古墳群一覧	7
第2表	生目古墳群地下式横穴墓一覧	8
第3表	出土土器観察表	108
第4表	出土石器観察表	108
第5表	生目1号墳各部計測表	110

第Ⅰ章 生目古墳群の概要

第1節 生目古墳群の地理的環境

生目古墳群が所在する宮崎県宮崎市は九州島の南東部に位置する。市域の大部分は、耳川河口～西都～綾～青島を結んだ三角地帯に広がる宮崎平野の南端に位置するが、北西側は九州山地、南西側には南那珂山地が連なる。市街地の中心には、県下最大の河川である大淀川が流れ、この大淀川の沖積作用によって現在の宮崎市街地が位置する低地部が形成された。

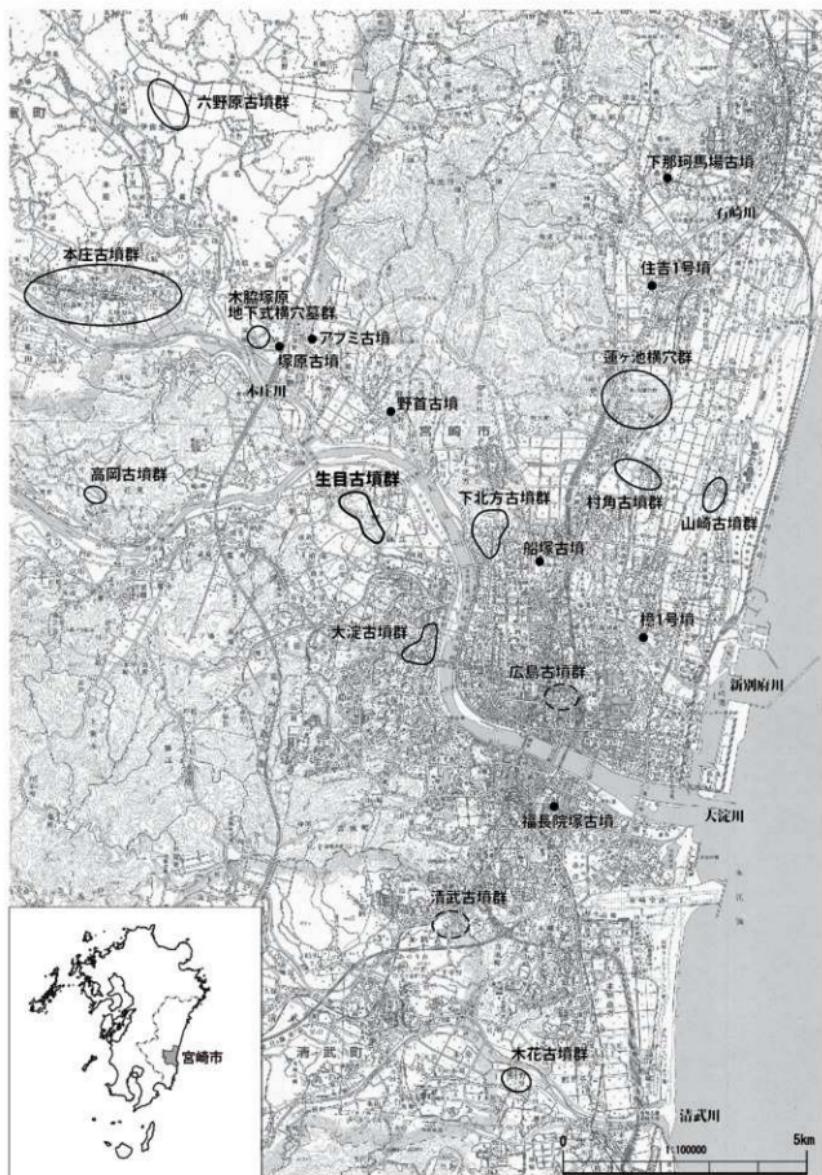
生目古墳群は、宮崎市街地から北西へ直線距離で約6km、内陸丘陵部の手前に位置する独立丘陵である跡江丘陵上とその周辺に位置する古墳の総称である。跡江丘陵は、宮崎平野の基盤層である宮崎層群の上に約1m程度の河川性の円礫層が堆積し、その上に姶良入戸火碎流堆積物（通称シラス：26,000～29,000年前）が5m～10m程度堆積することによって形成されている。丘陵の平面形はへの字形で、南北1.3km、東西1.2kmを測る。丘陵の北西部は小谷が入り組む起伏に富んだ地形となっているが、中央から南東部は、標高25～28m程度の比較的平坦な台地状の地形を呈し、生目古墳群の50基を数える古墳の大半はここに築かれている。丘陵眼下の北東側には、現在の跡江集落が広がる微高地が存在し、その向こう側には大淀川が流れている。この大淀川は内陸部から東流してきた流れを跡江丘陵を取り巻くように南へと変える。また丘陵の北西側で、大淀川の支流である本庄川と大淀川が合流することから河川を非常に意識した立地といえる。

第2節 生目古墳群の歴史的環境

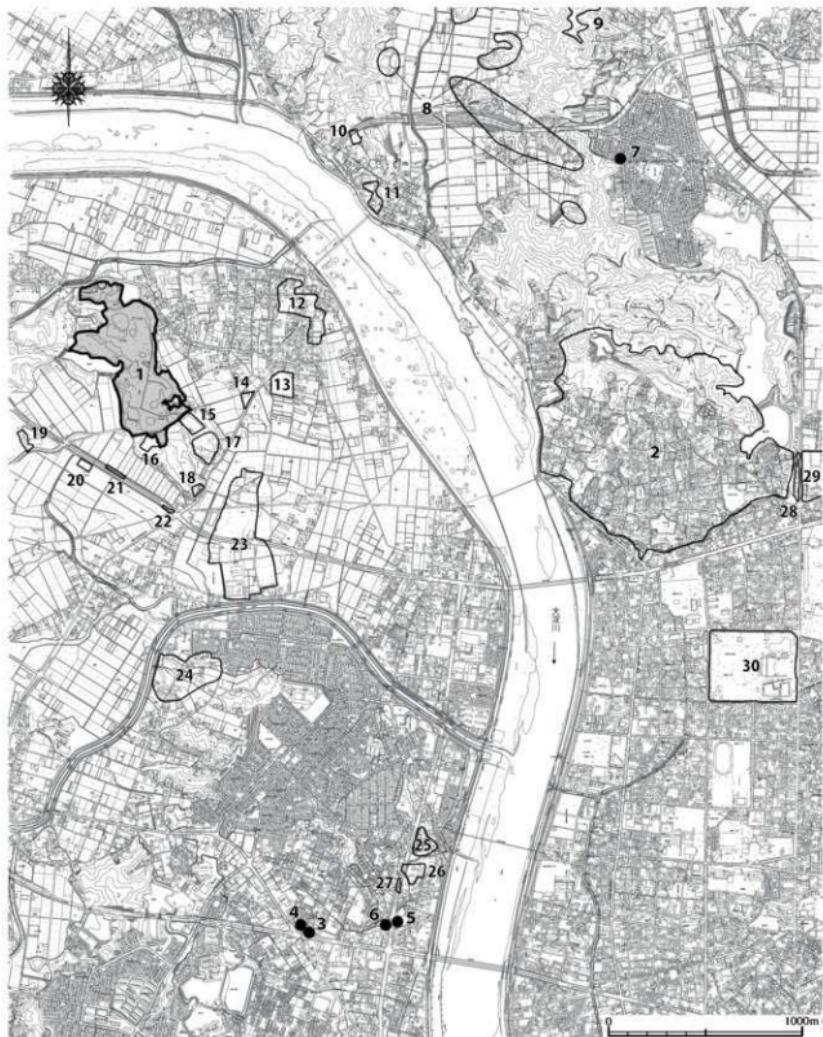
生目古墳群が所在する跡江丘陵上とその周辺には多くの遺跡が分布する。縄文時代の遺跡としては、跡江丘陵の南端に跡江貝塚が所在する。跡江貝塚はハイガイを主体とする上層と、シジミを主体とする下層に分かれ、縄文時代早期の貝殻文系土器や押型文土器、塞ノ神式土器、前期の轟式土器等が出土している。また同時期の貝塚として、大淀川を挟んだ対岸側に柏田貝塚がある。これら貝塚の形成時期は、いわゆる縄文海進の時期にあたり、当時は本丘陵付近まで海岸線が侵入してきていたことを示す事例となる。

弥生時代には、丘陵の南東部に弥生時代中期の環壕集落である石ノ迫第2遺跡が所在する。環壕は弥生時代中期の終わりには埋没するものの、集落自体は古墳時代初頭まで存続する。その他に、弥生時代終末期から古墳時代初頭の円形周溝墓、土坑墓が確認されているが、集落の衰退と共に墓域へと変化する状況が見て取れる。

古墳時代の遺跡は、大淀川の対岸の下北方遺跡群内に、中期から後期にかけて下北方古墳群が造営されている。この下北方古墳群は、生目古墳群と前方後円墳の築造時期が相違するようになされており、大淀川下流域における首長墓系譜の変動が明瞭に現れている。また生目古墳群から南東に直線距離で3kmほどの位置に、前期末から中期の古墳群と考えられている大淀古墳群が所在する。大淀古墳群は生目古墳群や下北方古墳群とは異なり低地に立地する。3号墳では壺形埴輪が採用されているものの、生目古墳群の壺形埴輪とは系譜が異なる。跡江丘陵に近接する古墳時代の集落遺跡としては、丘陵の北東側の小谷を挟んだ微高地に、弥生時代終



第1図 生目古墳群周辺主要古墳、古墳群分布図 (S=1/100000)



第2図 生目古墳群周辺主要遺跡分布図 (S=1/25000)

末期から古墳時代前期前半の堅穴住居が確認された城平遺跡が所在する。城平遺跡は、石ノ迫第2遺跡と併行しつつ、最終的に入れ替わるように集落を形成したと考えられている。古墳時代前期の集落であり、生目古墳群の造営に関わる集団の集落と考えられるが、調査範囲内で検出された堅穴住居の年代は、生目古墳群において前方後円墳の築造が始まる以前のものである。その他、丘陵の南東約0.8kmの位置に古墳時代中期から後期の堅穴住居が確認された間越遺跡や、現在も集落が立地する微高地上に営まれた古墳時代中期の大屋敷遺跡があるが、未だ生目古墳群の最盛期である前期半ばから後半にかけての集落は確認されていない。

古墳時代以降の遺跡としては、丘陵の南に近接する微高地上に、古代の掘立柱建物、井戸などが検出された深田遺跡が所在する。中世になると、跡江丘陵の南東端に跡江城が築かれる。また生目3号墳、22号墳では、後円部3段目の肩口を削る形で薬研堀を巡らせていることから、陣城のような施設が後円部墳頂平坦面に構築されていた可能性がある。

第3節 大淀川下流域の古墳と古墳群

大淀川下流域において3世紀代に遡る前方後円墳は未確認であり、現段階で最古の前方後円墳は4世紀前葉に築造されたと考えられる橿1号墳である。橿1号墳は海岸部近くの砂丘上に立地し墳長52.5mを測る。後続する前方後円墳は造られておらず、首長墓系譜は継続しない。次にやや遅れて生目古墳群に生目21号墳が築造される。これら2墳は葺石をもたず、後円部に対して短小な前方部を有する点で共通している。生目古墳群では21号墳以後、5世紀初頭の5号墳まで連続して前方後円墳が築造され首長墓系譜を形成しているが、4世紀代に3基の100～140m級の前方後円墳が築造された後、4世紀末の14号墳の段階で60m級まで規模を減じる。この段階には、生目古墳群の南東の沖積平野に大淀3号墳が築造される。大淀3号墳は直径40mの円墳で生目古墳群とは異なる系譜の壺形埴輪が出土している。前方後円墳の可能性も指摘されており、生目古墳群との関係性が注目される。生目古墳群で前方後円墳が途絶える5世紀前葉には、大淀川を挟んだ対岸の下北方古墳群内に前方後円墳が築造される。前後関係は明確ではないが、下北方11号墳、3号墳が築造され、その後5世紀半ばに1号墳が築造される。11号墳は前方部が削平されているため判然としないが、3号墳、1号墳は80m級の墳丘をもつ。5世紀後葉には下北方古墳群で前方後円墳が途絶え、再び生目古墳群に墳長46mの前方後円墳である7号墳が築造される。しかしその後は生目古墳群で前方後円墳が築造されることなく、下北方古墳群に墳長98mの13号墳が築造される。13号墳は6世紀初頭の築造で、それまで標高20m程度の通称下北方台地上に築造された3基の前方後円墳とは異なり、標高70mの越ヶ迫丘陵上に立地する。13号墳からは生目古墳群を見渡すことができ、下流域を統治した首長墓に相応しい立地である。13号墳に後続する首長墓である船塚古墳は墳長84mで沖積地にその立地を移す。詳細は明らかではないが墳形から6世紀中頃に位置付けられている。船塚古墳以後、大淀川下流域では大型の前方後円墳の築造が停止する。船塚古墳に続く段階の首長墓としては、大淀川河口近くに築造された直径40m程度の円墳である福長院塚古墳へ移動したと考えられている。

第4節 生目古墳群の既往の調査

生目古墳群は前方後円墳 8 基、円墳 42 基、総数 50 基の古墳群である。昭和 18 年 9 月 8 日の国指定の際には、前方後円墳 7 基、円墳 36 基の計 43 基であったが、その後の発掘調査によつて、墳丘が消滅した古墳の確認や、墳丘と思われたマウンドが昭和初期に切通しの道を造る際の廃土山であったことが確認されるなどによって、現在の数字となつてゐる。

生目古墳群には、九州島で唯一、3 基の 100 m 級前方後円墳が同一古墳群内に存在する。その中で最大規模の 3 号墳は、墳長 137 m、後円部 3 段、前方部 2 段築成である。これまでに 19ヶ所の調査区を設定し調査をおこなつてゐるが、3 号墳に伴う遺物は出土していない。3 号墳は墳丘斜面に葺石、平坦面に敷石が施されており、墳丘全面が石で覆われている。また墳丘外にも幅約 1.5 m の礫敷帯が巡ることが明らかになつてゐる。墳形から 4 世紀中頃の築造と考えられてゐる。

22 号墳は前方部の先端が削平されているため復元長となるが 101 m と想定されている。発掘調査によつて、後円部 3 段、前方部 2 段築成であり、焼成前穿孔の壺形埴輪をもつ。前方部の右側面において張り出し部が確認されており、そこから集成編年 4 期に位置付けられる土師器が出土している。

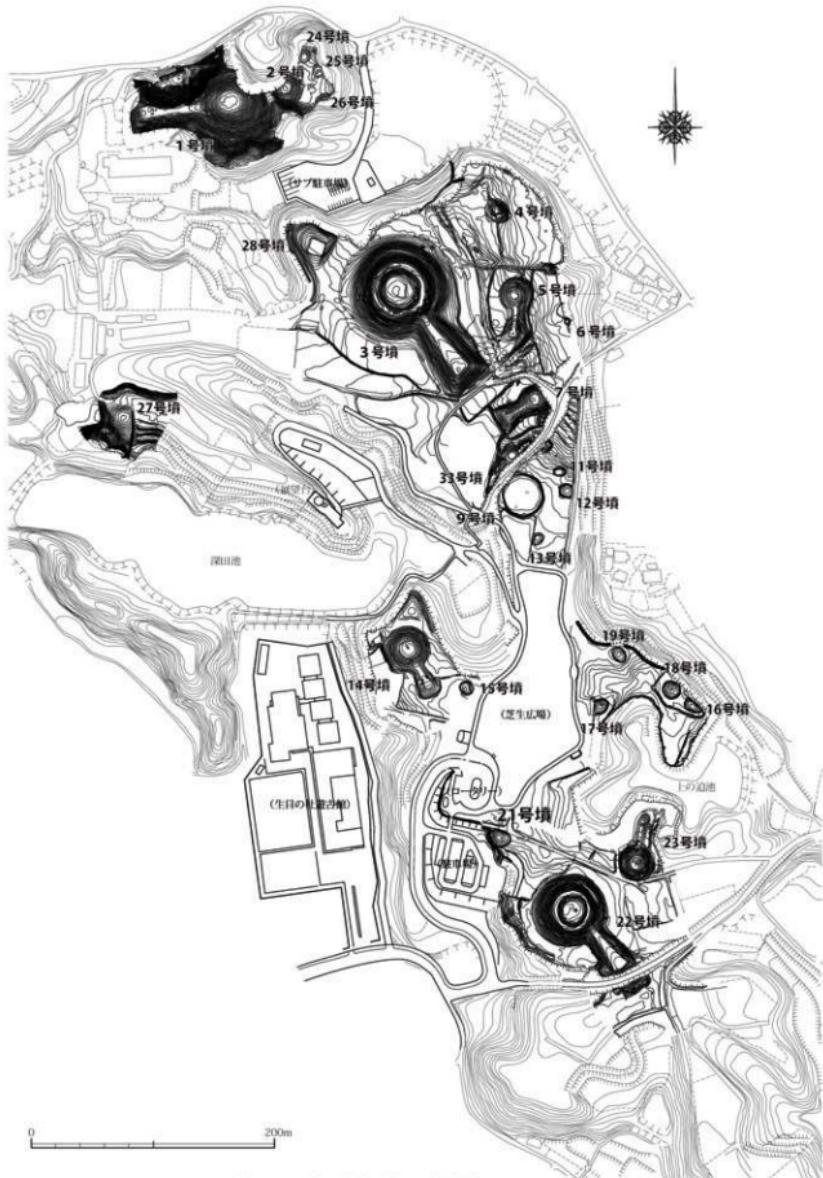
墳長 63 m の 14 号墳は、後円部、前方部共に 2 段築成で、葺石が良好な状態で残存しており、墳丘斜面、平坦面共に石で覆われていたことが明らかになつてゐる。また壺形埴輪を、墳頂平坦面、スロープ上に樹立していたことが明らかになつてゐる。さらにお出しありからテラス面にも樹立していた可能性が高い。この壺形埴輪の形状から、14 号墳は 22 号墳に後続する時期に位置付けられれている。

14 号墳に後続する 5 号墳は、墳長 57 m を測り、後円部、前方部共に 2 段築成である。14 号墳と同様に壺形埴輪を樹立するが、後円部、前方部墳頂面の平野部側にのみ少量樹立している。また、葺石も斜面部に限定され、埴輪、葺石共に退化傾向にある。

墳長 46 m の 7 号墳は、後円部南西側周溝から、後円部墳丘内の中心方向に玄室をもつ、大型の妻入り地下式横穴墓が確認されているが、構築状況や規模から 7 号墳の中心埋葬施設の可能性が高い。また、この地下式横穴墓と墳丘主軸を挟んだ対面側の位置から造り出しが検出され、多量の土師器、須恵器が出土しており、これらの遺物から集成編年 8 期に比定されている。

生目古墳群で最も小規模な前方後円墳である 21 号墳は、出土した底部穿孔二重口縁壺、壺形埴輪から 4 世紀前半に位置付けられている。周溝内からは、5 世紀初頭に位置付けられる宮崎平野部最古の 38 号、43 号地下式横穴墓を含む、13 基の地下式横穴墓が検出されたが、いずれも周溝外縁側に玄室を設けるものである。

前方後円墳以外の円墳に関しても、その実態が明らかになりつつある。前方後円墳の空白期に築造されるもの（16 号墳：集成編年 10 期）や前方後円墳と並存する可能性があるもの（12 号墳：集成編年 5 ～ 6 期）とそのあり方は一様ではない。また古墳群中最大規模の円墳である 9 号墳（径 38 m）は 33 号墳を前方部とする墳長 60 m の前方後円墳である可能性が非常に高いが、くびれ部が完全に失われているため断定は困難である。



第3図 生目古墳群主要古墳位置図 (S=1/4000)

第1表 生目古墳群一覧

現No.	旧No.	墳形	規模(m) 長×円径×高	規格	算石	出土遺物	発掘調査の有無	備考
1	6	前円	復元130×74×13.3	後円部3段、前方部2段	有		○	後円部3段目斜面波状葺石
2	5	円	30	2段	無		○	埴丘下に玄室を設ける地下式横穴墓
3	17	前円	137×77×11	後円部3段、前方部2段	有		○	後円部上段に中世の要研磨が認められる
4	18	円	21		無		○	
5	19	前円	57×29×4.4	後円部前方部2段	有	円筒埴輪?、壺形土器、高杯	○	周溝外側で19号地下式横穴墓を確認
6	20	円	8		無		○	
7	21	前円	46×24×3.9	後円部2段、前方部2段、造出し有	有	土師器(壺、蓋、碗、高杯)、須恵器(环、高杯、ハツク)、把手付鉢、大甕、脚台付壺、壺形踏台) 石付垂玉、石製小玉、石製結縁車	○	後円部中心に向かって、18号地下式横穴墓を構築。その他の周溝内から8基、周溝外から4基の地下式横穴墓を確認。
8	22	円		無段築	無		○	周溝内に2基の地下式横穴墓
9	25	円(前円)	38(60)	埴丘上部削平	無		○	33号墳を前方部とする前方後円墳か
10	23		11				○	古墳ではない。平成25年度調査
11	24	円	10				○	周溝部分調査
12	円	12					○	周溝部分調査
13	26	円	11				○	生目古墳群周辺道路で周溝を調査
14	27	前円	63×39×4.4	後円部、前方部2段	有	壺形埴輪	○	周溝内より22号地下式横穴墓を確認
15		円	11		無		○	昭和37年度確認
16	30	円	16		無	須恵器	○	
17	32	円	17		無	土師器(壺、高杯)	○	周溝内地下式横穴墓を確認
18	29	円	17		無		○	
19	28	円	15		無		○	周溝外側で地下式横穴墓を確認
21	35	前円	36×23×3.3	無段築か	無	壺形埴輪、土師器(高杯、壺、鉢、小型丸底壺等)	○	周溝内より地下式横穴墓を確認
22	34	前円	101×60×9.2	後円部3段、前方部2段	有	壺形埴輪、土師器(壺、高杯、壺)	○	周溝内より、張り出し部、23号地下式横穴墓を確認
23	33	前円	57×30×4.9		無		○	
24	2	円	13		無	二重口錐盃	○	
25	3	円	18		無		○	周溝内で地下式横穴墓(平成5年度)
26	4	円	26		無		○	
27	13	円	19				○	
28	14	円	20		無		○	
29	15	円					○	
30	16	円					○	
31	未F	円			無		○	平成17年度確認(5号墳と7号墳の間)
32	未G	円			無		○	平成16年度確認(7号墳南側)
33	41	円			無		○	平成14年度確認(9号墳・新30号墳間)・概報VIで旧3号墳と誤認・源考記
34	31	円					○	
35	36	円					○	平成25年度調査・古墳ではない
36	1	円						
37	7	円						
38	8	円						
39	9	円						
40	10	円						
41	11	円						
42	12	円						
43	37	円						
44	38	円						
45	39	円					○	
46	40	円					○	
47	未A	円	10.5		無		○	11号地下式横穴墓を埋葬主体
48	未B	円	9.5		無		○	12・13号地下式横穴墓を埋葬主体
49	未C	円	17		無		○	
50	未D	円	10.5		無		○	14号地下式横穴墓を埋葬主体
51	41	円					○	昭和58年調査
52	42	円						
53	43	円						

第2表 生目古墳群地下式横穴墓一覧

番号	構築位置	玄室方向	調査状況
1	25号墳周溝内	周溝外	豊坑半裁、澳門確認
2	3号墳周堤外	周溝外	完掘
3	7号墳周辺		玄室陥没、プラン確認
4	7号墳周辺		豊坑半裁、澳門確認
5	7号墳周辺		豊坑確認
6	7号墳周辺		豊坑確認
7	9号墳周辺		完掘
8	9号墳周辺		完掘
9	15号墳南東約50m		豊坑確認
10	47号墳周辺		完掘
11	47号墳周溝内	墳丘内	完掘
12	48号墳周溝内	周溝外	完掘
13	48号墳周溝内	墳丘内	完掘
14	50号墳周溝内	墳丘内	完掘
15	3号墳周溝内	周溝外	完掘
16	28号墳周溝内	墳丘内	豊坑確認
17	7号墳周溝内	周溝外	豊坑、玄室確認
18	7号墳周溝内	墳丘内	玄室陥没、豊坑完掘、澳門確認
19	5号墳周辺		完掘
20	21号墳周溝内	周溝外	セクションベルト残し掘削
21	7号墳周溝内	周溝外	豊坑サブトレ、澳門確認
22	14号墳周溝内	周溝外	豊坑半裁
23	22号墳周溝内	周溝外	豊坑確認
24	7号墳周溝内	墳丘内	豊坑サブトレ、澳門確認
25	7号墳周溝内	周溝外	豊坑確認
26	7号墳周溝内	周溝外	豊坑確認
27	8号墳周溝内	周溝外	豊坑確認
28	8号墳周溝内	周溝外	置き土検出
29	3号墳周溝内	周溝外	置き土検出
30	3号墳周溝内	周溝外	置き土検出
31	3号墳周溝内	周溝外	置き土検出
32	3号墳周溝内	周溝外	置き土検出
33	3号墳周溝内	周溝外	豊坑確認
34	3号墳周溝内	周溝外	置き土検出
35	3号墳周溝内	周溝外	置き土検出
36	3号墳周溝内	周溝外	置き土検出
37	21号墳周溝内	周溝外	豊坑確認
38	21号墳周溝内	周溝外	豊坑、玄室半裁
39	21号墳周溝内	周溝外	置き土検出
40	21号墳周溝内	周溝外	置き土検出
41	21号墳周溝内	周溝外	セクションベルト残し掘削
42	21号墳周溝内	周溝外	セクションベルト残し掘削
43	21号墳周溝内	周溝外	セクションベルト残し掘削
44	21号墳周溝内	周溝外	豊坑半裁
45	32号墳周溝内	墳丘内	置き土検出
46	21号墳周溝内	周溝外	豊坑、玄室半裁
47	21号墳周溝内	周溝外	豊坑完掘
48	22号墳周溝内	周溝外	置き土検出
49	19号墳周辺		豊坑、玄室半裁
50	17号墳周溝内	周溝外	置き土検出
51	9号墳周溝内	墳丘内	豊坑確認
52	33号墳周溝内	周溝外	豊坑確認
53	33号墳周溝内	周溝外	豊坑サブトレ
54	21号墳周溝内	周溝外	平面検出
55	21号墳周溝内	周溝外	平面検出
56	1、2号墳間	2号墳墳丘内	豊坑確認

第Ⅱ章 生目1号墳、2号墳、24号墳、25号墳、26号墳の発掘調査成果

第1節 調査の経過と概要

第1項 測量調査

測量調査は、本来であれば発掘調査以前におこなうべきものであるが、当初計画では宮崎大学考古学研究室作図の測量図を活用する予定であったため、結果的に発掘調査が先行する形となった。平成25年度、26年度と発掘調査を進めるに当たり、現地と図面上での調査区位置の齟齬の発生や、宮崎大学名誉教授の柳沢一男氏から1号墳の図面が未完成である旨を伺ったことから、未測量であった2号墳、24号墳、25号墳、26号墳を含む範囲を追加した上で、再測量することにした。

基準点は、平成25年度に基準点設置委託において設置した閉合トラバースの値を用いたが、樹木により見通せない箇所も多く、その場合は開放トラバースによって基準点を増設し測量をおこなった。測量方法はトータルステーションと電子平板を用いて、墳丘部分は等高線を追う形で測量し、周辺地形は独標高を計測して、その値からソフトを用いて等高線を作成するという方針で進めていた。しかし墳丘部分に関しては余りに見通せない箇所が多いことと、他の発掘調査や整理作業との兼ね合いで、1名での測量（本市では自動追尾のトータルステーションを導入しているため1名で測量作業が可能）が中心になったことから作業効率を鑑み、変化点を押さえた上で、墳丘部分も独標高を計測し、ソフトで等高線を作成する方針に変更した。

現地における測量調査は、発掘調査等を挟みながら断続的に、平成27年5月13日から平成28年5月19日にかけておこなった。

第2項 発掘調査

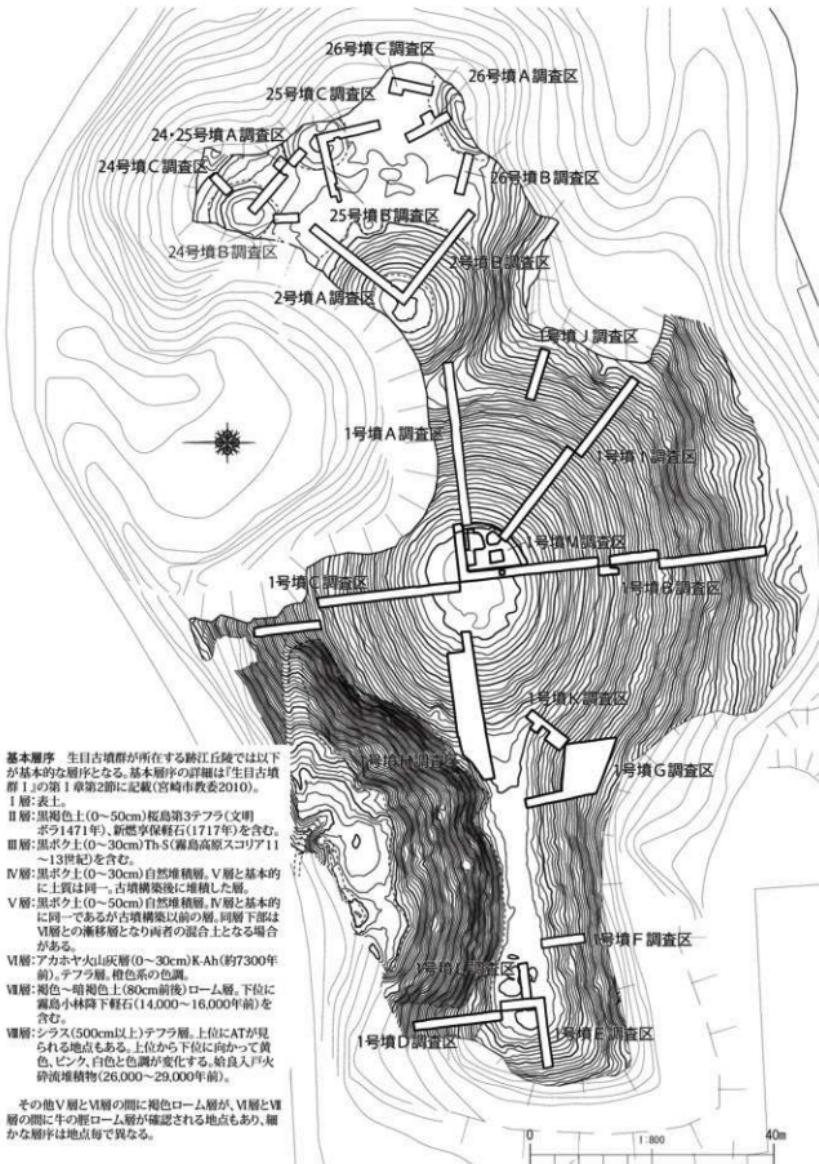
発掘調査は、1号墳は平成25年度から27年度、2号墳は平成27年度、24号墳、25号墳、26号墳は平成28年度、29年度におこなった。

平成25年度の1号墳の調査では、後円部、前方部が3段築成であることを確認し、墳丘斜面には葺石、平坦面には礫敷を施していることが明らかになった。また、後円部3段目斜面の葺石が非常に良好な状態で遺存しているとともに、斜面途中に複数の小平坦面をもつ階段状の構築方法を採用していることも確認された。

平成26年度の1号墳の調査では、前方部頂には礫敷が施されていないことが確認された。また、後円部3段目斜面の階段状の葺石は、より遺存状況がよい箇所で確認すると、小さな円弧が連続するような波状を呈することが明らかになった。

平成27年度の調査では、1号墳において、後円部第2段平坦面と前方部第2段平坦面がスロープ状に連続していることを確認した。2号墳では、2段築成であること、周溝を有すること、葺石をもたないこと、墳丘の規模が直径30mであることが明らかになった。

平成28、29年度の調査では、遺存状況が非常に悪いものの、各古墳の墳丘、周溝が検出され、24号墳が径13m、25号墳が径18m、26号墳が径26mに復元された。



第4図 基本層序及び調査区配置図 (S=1/800)

第2節 生目1号墳の調査成果

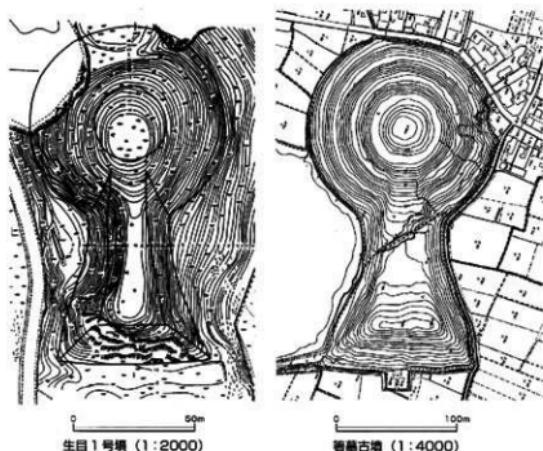
第1項 生目1号墳の研究史

生目1号墳における最初の調査は、1941年（昭和16年）に原田仁氏によっておこなわれた測量調査である。原田氏による測量図は、当時としては非常に精度の高いものであったが、1990年に『宮崎県県史だより』で紹介されるまで広く知られることはなかった。

1号墳に関する最初の具体的な位置付けは、長津宗重氏によるもので、『前方後円墳集成』九州編において3号墳とともに集成編年5期に位置付けている（長津1992）。長津氏は1号墳に関して「前方部がバチ形に開いている」としたが、当時は、日向地域の古墳は西都原古墳群の一部を除いてほとんど前期まで遡るものはない、という前提に立脚し検討したための位置付けであろう。

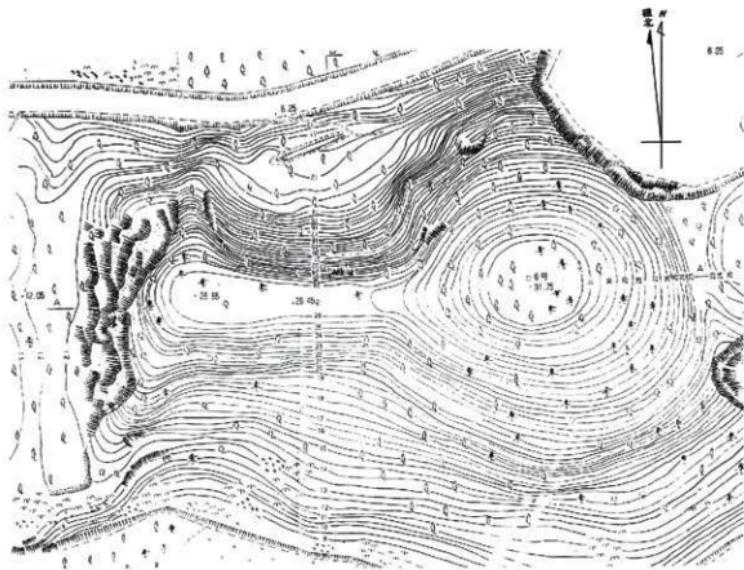
野間重孝氏は『宮崎県史』において「古式古墳の形態を備えている」としながらも、古墳群の築造が「古墳時代中期前半には行われ始めた」と想定していることから、1号墳そのものの築造時期には言及していないが、中期前半の築造を想定していたと思われる（野間1993）。このような位置付けの背景には、当時の宮崎県内の古墳全体にいえることであるが、戦前、戦中に国指定、県指定史跡になったため、良好な状態で古墳が保存されてきたものの、発掘調査による内容解明が成されていないため、根拠不明のまま古墳時代中期以降に位置付けられていたことがある。生目1号墳を含む生目古墳群も例に漏れずその対象となっていたのである。

この位置付けに対して墳丘測量図を用いた墳丘規格の比較から、古墳編年の見直しをおこなったのが柳沢一男氏である。柳沢氏は原田氏によって作成された測量図と、昭和57年度に宮崎市教育委員会が作成した航空測量図を用いて1号墳の墳形を詳細に検討した。その上で、墳丘測量図の重ね合わせによって、立面形には大きな相違があるものの、1号墳の平面形が箸墓古墳の1/2規模の相似形であることを明らかにし、その時期を箸墓古墳と同じ前方後円墳集成編年1期に位置付けた。また、3号墳は行燈山古墳の3/5規模の相似形墳とし、集成編年3期に、22号墳は柄鏡形前方後円墳の検討から集成編年4期に位置付けた（柳沢1995）。その後、柳沢氏を中心とした宮崎大学考古学研究室によって精力的に墳丘測量図が作成され、3号墳は新しい測量図を基に渋谷向山古墳の1/2規模の相似形墳に位置付けを訂正している（柳沢1997）。



第5図 生目1号墳墳丘比較図

原田仁測量図



第6図 生目1号墳既往測量図① (S=1/1000)





宮崎大学考古学研究室測量図（未完成）

第7図 生目1号墳既往測量図②(S=1/1000)

墳に関しては、発掘調査の対象とならなかったこともあり、基本的に集成編年1期、2期（もしくは3世紀後半、4世紀前葉）という違いはあるものの、生目古墳群で最古の首長墓であるという位置付けに変化はなかった。

生目1号墳の位置付けが見直されたのは柳沢氏による再考である。柳沢氏は1号墳と箸墓古墳の立面形が大きく異なることに再注目し、前方部頂面がほぼ水平であることから、佐紀陵山古墳や五社神古墳との類似性を強調すべきかもしれないとした（柳沢2011）。その後、平成25年度から宮崎市教育委員会によって生目1号墳の発掘調査が開始、発掘調査成果も取り入れながら、1号墳を4世紀中葉もしくは4世紀末葉に下る可能性もあるとした（柳沢2014）。

現状において柳沢氏は、生目古墳群に、北群、南群と2系列の首長墓系譜を想定しており、1号墳は北群において3号墳に後続する首長墓として4世紀後半に位置付けられている（柳沢2015）。

柳沢氏の論考は、生目古墳群のみならず南九州の古墳編年全体を見直すものであり、その後の研究に大きな影響を与えた。ただし、生目古墳群が前期を中心とした首長墓系譜であるということは共通認識となつたが、最初の首長墓と目された1号墳の築造時期をどこまで遡らせるかについては、4世紀中葉（北郷1995）、4世紀前半までには出現（東1997）と研究者によって異論があった。

宮崎市教育委員会では、生目古墳群において平成10年度から史跡整備に伴う発掘調査を開始した。その後は柳沢氏の編年案を基に、発掘調査成果によって随時細かな修正していくという形で、生目古墳群の位置付けが各研究者によって成されてきた（稻岡2003、北郷2005、有馬2006、橋本2010、和田2010）が、1号



第8図 生目1号墳測量図 (S=1/600)

第2項 生目1号墳の立地

生目1号墳の築造位置 生目1号墳は、現況では他の前方後円墳が所在する跡江丘陵の北端から、底面幅30m程度の小谷を挟んで所在する独立丘陵上に立地する。丘陵は東西方向に長軸をもち、東西約200m、南北約120mと小規模である。現況における丘陵の最高点は1号墳の後円部頂であり、標高は37.5mを測る。丘陵の西側は、昭和30年代から40年代にかけて1号墳の前方部前面と共に大きく削平を受けているが、原田仁氏による測量図や昭和30年代の航空写真を参考にすると、本来は跡江丘陵が半島状に東西方向に突き出した部分であり、1号墳築造の際に尾根を切断し前方部前面を形成、その後昭和に至り、1号墳築造の際に生じた前方部前面の尾根切断部分を拡大する形で地形を改変したため、現況では見かけ上、独立丘陵のような状態になったと想定される。1号墳はその半島状の尾根の中央付近、最も南北方向の幅が広くなっている位置に後円部を置き築造されている。丘陵の北側には現在は水田地帯が広がりその北に大淀川が所在するが、1号墳築造当時は大淀川の氾濫原が丘陵直下まで広がっていたと想定される。丘陵の北西側から西側には、大淀川の自然堤防と想定される微高地が広がっており、現在の有田集落が営まれている。

生目1号墳の可視範囲 1号墳は、跡江丘陵が広がる南側方向を除いた、南東方向から北を経て西南方向までの広い可視範囲を有する。大淀川は丘陵の西から北を経て南東方向へと流れが、そのいずれの箇所からも1号墳を視認することができる上、対岸からも1号墳を認識することができる。また北西方向には大淀川の支流である本庄川と大淀川との合流地点が所在するが、合流地点からは無論のこと、本庄川を遡り、塚原古墳が所在する丘陵や、本庄古墳群が所在する台地の東端からも1号墳を視界に納めることができる。その一方で、現在の宮崎市街地からの可視範囲は、跡江丘陵や小松台、下北方台地などに遮られ、南東方向の限られた範囲となる。

1号墳における、古墳を目視することができる範囲「景観領域」(三好2001、栗林2008)、を検討すると、1号墳は墳長約130m、後円部径74mであることから、側面から見た時の目視限界距離は約6km、後円部側から見た時の目視限界距離は約4kmとなる。生目1号墳に併行する時期の周辺集落の様相は明らかではないが、集落が存在しないのではなく、現段階で発掘調査が及んでいないと考え方が妥当である。近接する古墳時代の集落である、城平遺跡、大屋敷遺跡が所在する微高地は、ほとんどの範囲から1号墳を視認することができる。また、現段階で古墳時代の集落は確認されていないが、所在する可能性がある、現在の有田地区の微高地からも1号墳を視認することができる。さらに大淀川を挟んで西側に立地する、古墳時代の水田遺構が確認された町屋敷遺跡や、その東に位置する現在の倉岡地区的微高地からも1号墳を視認することができる。その一方で、跡江丘陵の南東に近接する間越遺跡からは視認することができない。

1号墳は跡江丘陵の北端に位置し、最も大淀川を意識した立地にある。このことから、「交通の要衝を掌握した首長の墓」と位置付けることも可能であるが、基盤集落との関係を論じるには、周辺集落の調査の進展を待たなければならない。なお、1号墳からの可視範囲や1号墳を視認することができるか否かの検討には、現地確認及びカシミール3Dを用いておこなった。

第3項 後円部の調査成果

(1) A調査区

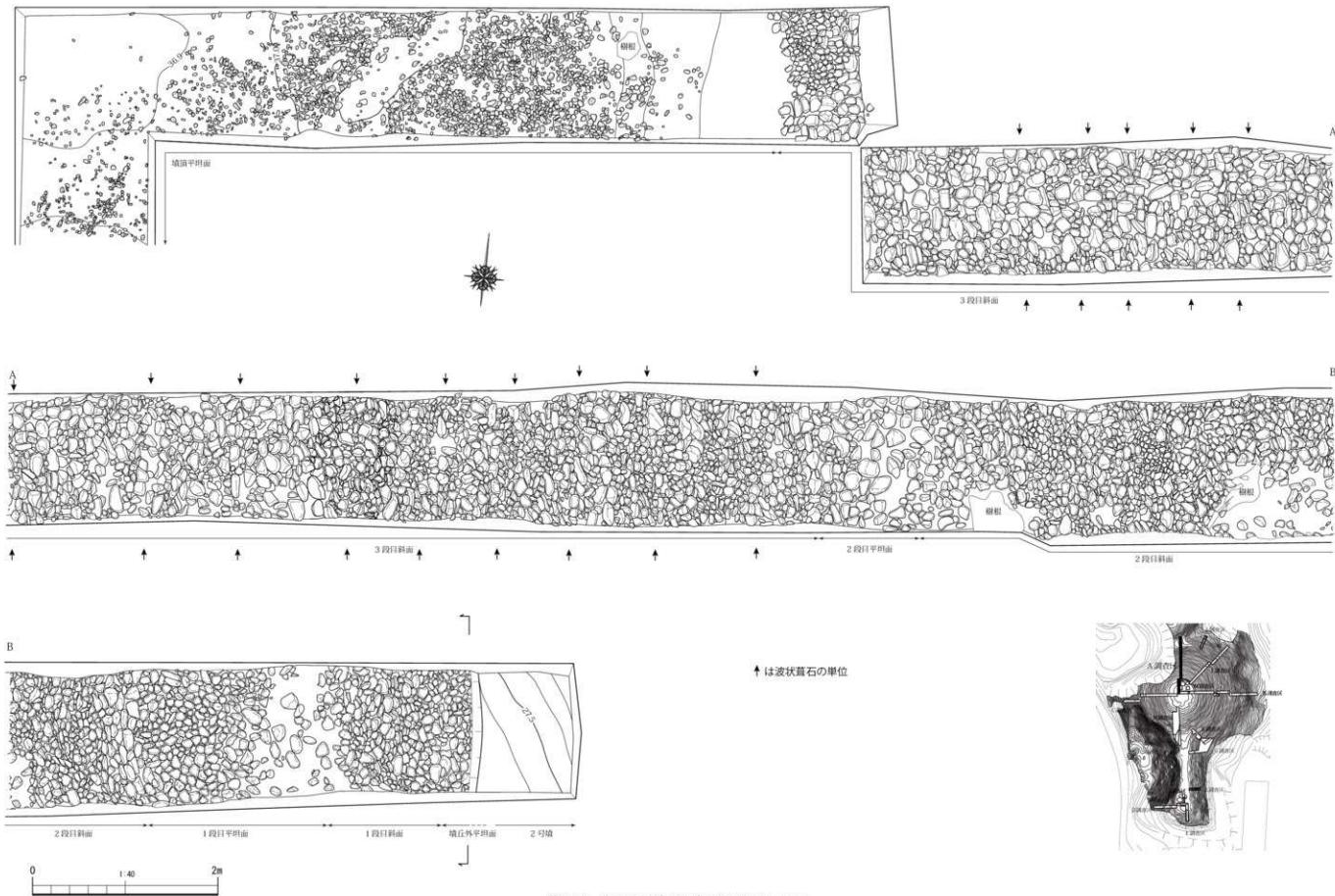
概要 後円部の中心から墳丘主軸に沿って東側に設定した調査区で、調査面積は 50.36 m²である。後円部東側の形状及び構造、東に隣接する 2 号墳との関係を調査目的とした。平成 25 年度の調査において、2 号墳との関係性が明確にできなかつたため、翌平成 26 年度に再度拡張する形で調査をおこなった。

古墳構築後の土層堆積は良好で、最も薄い斜面途中においても 20cm 程度の堆積がみられた。このため葺石が非常に良好な状態で遺存していた。総じて削平を受けていることが多い墳頂部も、削平、流出することなく約 40cm の厚い堆積土に覆われており、小礫を敷き詰めた築造当時の状況が検出された。また墳端付近は 2 号墳との間が谷状の地形となっており、土が堆積しやすい状況となっていたため、最大で 1.4 m という厚い堆積土に覆わされていた。ここでは 2 号墳丘下に玄室を設ける地下式横穴墓が検出された。

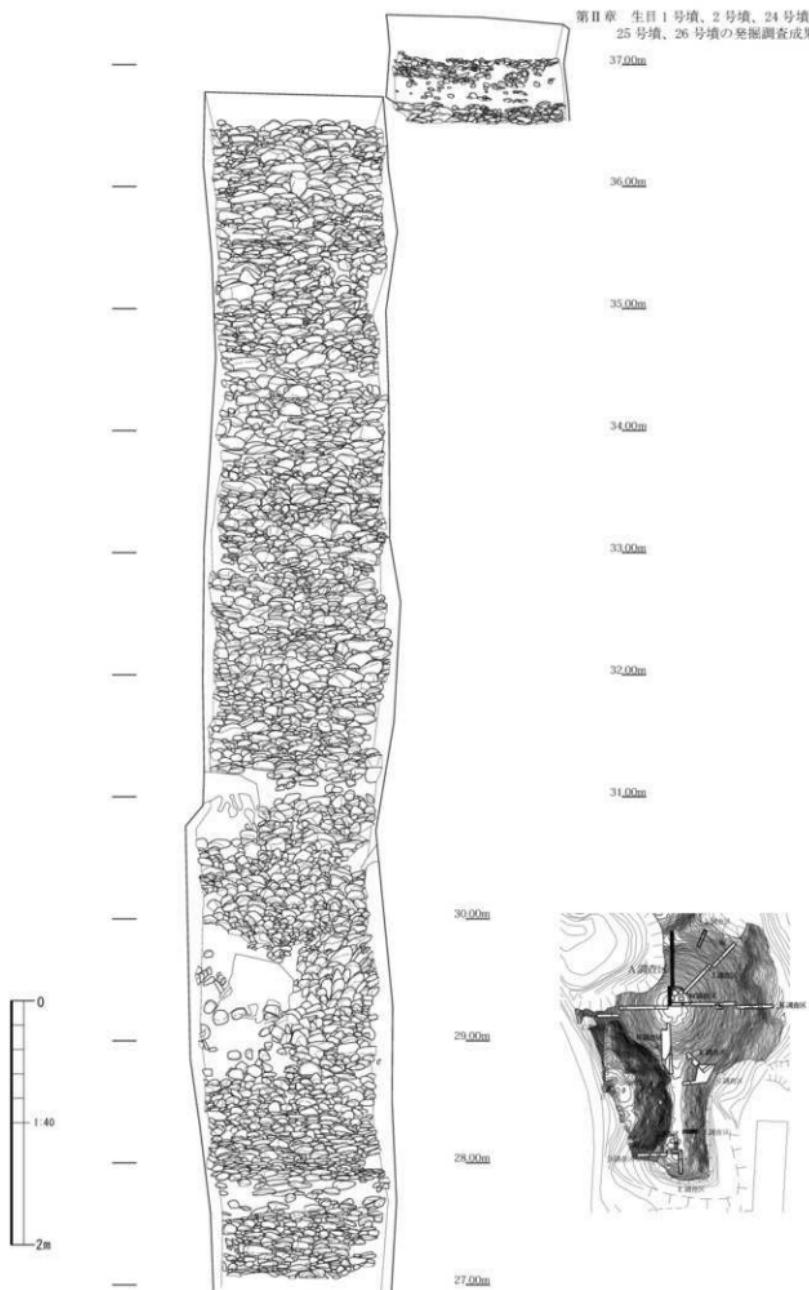
墳丘は端部から墳頂までの間に、2箇所の平坦面を設けて 3 段に築かれている。東側に 2 号墳が隣接する関係上、1 段目斜面を短く探すことによって墳形を調整している。そのため後円部の平面形を見ると東側が押しつぶされたような形状となっている。斜面には葺石を、平坦面には前述の墳頂を含め礫敷が施されている。

墳丘外平坦面 1 段目斜面基底石の外側から、斜度 10° で幅 0.6 m の範囲から礫敷が検出された。調査区中央付近では、礫敷の外縁端から東側が地下式横穴墓の堅坑となっているため、堅坑構築の際に削平を受けている。しかし北壁際は、堅坑の影響がほとんどなく、さらに堅坑が 2 号墳の墳丘端を削り込む形で構築されていることから、本来の平坦面幅をほぼ反映していると思われる。詳細は後述するが、1 号墳、2 号墳は同時に規格され、計画的に築造されたと考えるが、2 号墳は葺石を施さないため、両墳間の堀切底面は 1 号墳に所属する施設との認識で構築されたといえる。敷設される礫は基本的に平置きであり、そもそも転落石が少数であることも相まって、両者の区分は容易であった。礫敷の下部構造は、地山上に直接敷設するのではなく、置土をした上で礫を敷設している。

1段目斜面 1 段目斜面は前述のとおり 2 号墳が東に隣接する関係から、水平距離 1.7 m、斜距離 1.8 m、高さ 1.0 m と非常に短く造られている。斜度は 38° で他の調査区で確認される 1 段目斜面に比べて急である。墳丘端部の基底石は、調査区南壁付近で長径 20cm、短径 10cm 程度の礫を横向きに据えている状況が確認された。周囲の葺石や礫敷にも長径 15cm 程度の石材も用いられているため、視覚的な効果は乏しい。また調査区中央から北壁にかけては明瞭な基底石が据えられていない。葺石は長手積みと小口積みを併用しているが、ここでは長手積みが優勢である。樹根等の影響により転落している箇所もあるが、高さ 0.8 m までの範囲は比較的良好に葺石が遺存している。崩落していない箇所に關しても、金属製の串を葺石の隙間に差し入れることにより確認したが、葺石の構築において裏込めや控え積みへの礫の使用はみられない。1 段目斜面は地山削り出しで墳丘を構築しているが、粘性に乏しいシラス面に直接打ち込むように積み上げたと考えられ、裏込めに土を使用していたとしても地山土を利用していたと考えられる。



第9図 生目1号填A調査区平面図 (S=1/40)



第10図 生目1号墳A調査区立面図 (S=1/40)

1段目平坦面 1段目平坦面は地山削り出しにより形成されている。斜度は 8° で、幅は1.4m、長径15cm前後の礫を平置きに敷き詰めている。外縁側の1段目斜面との境界付近は礫が乱れているが大きな崩れではなく、概ね本来の形状を保っていると思われる。境界付近において、周辺と比較するとやや大振りな長径20cm前後の礫が集中して検出されており、1段目平坦面と1段目斜面を区画する石列と考えられる。

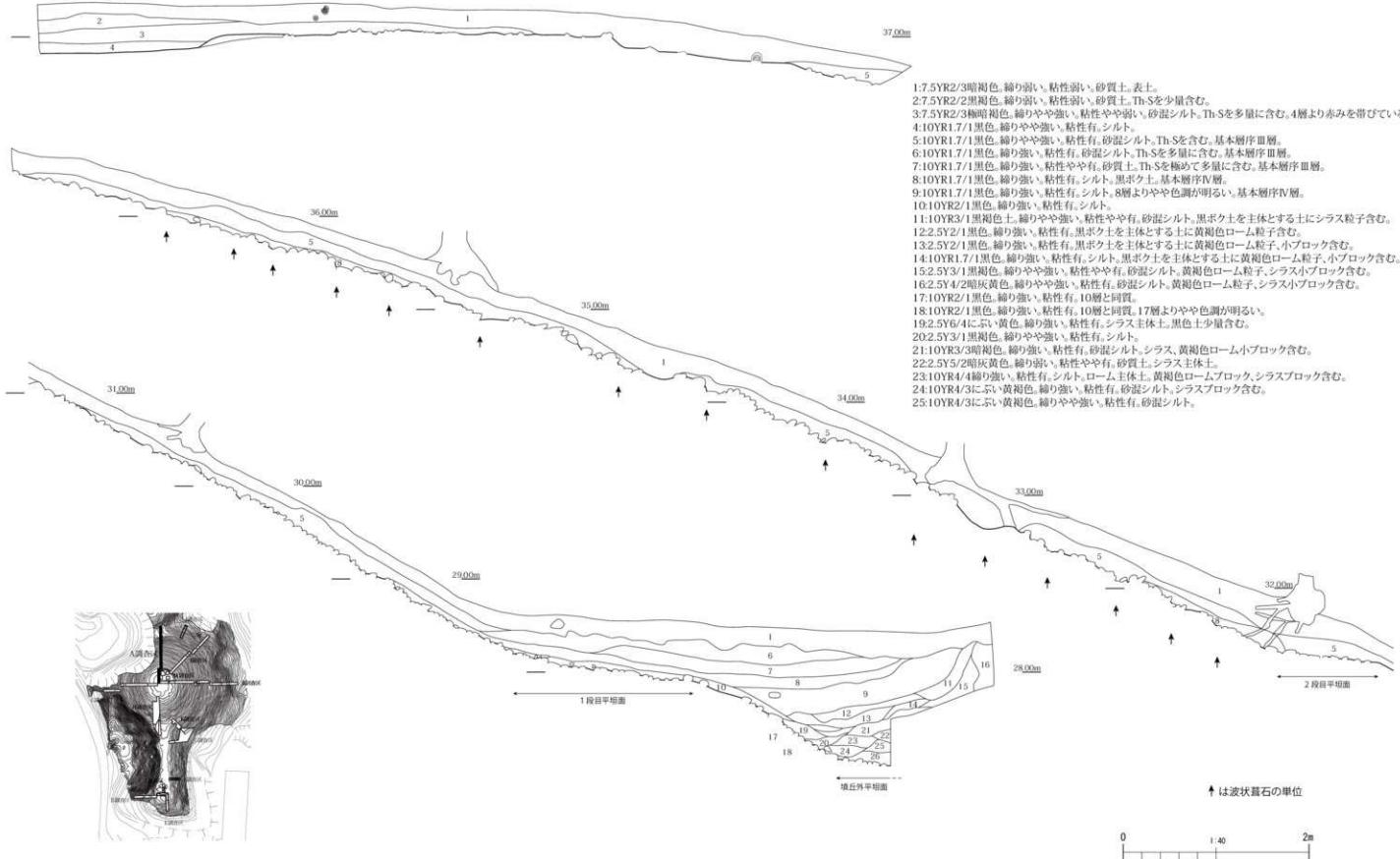
2段目斜面 2段目斜面は、1段目平坦面から斜度 29.5° の角度で立ち上がり、水平距離5.9m、斜距離6.7m、高さ3.3mを測る。基底石は20cm前後のやや大振りな礫を横置きにしているが、その上位3段から4段にわたって、同規模の石をやはり横置き（長手積み）に積み上げる状況が検出されている。その間の角度は斜度 15° であり、1段目平坦面から緩やかに立ち上がる。その上位の小口積み主体の箇所になると、角度を違え斜度は前述の 29.5° に変化する。使用される礫は長径5cmから25cm程度とばらつきがあるが、20cmを超える大型の石材は長手積みにされる傾向がある。長手積みの配置に規則性がないことから機能的なものではなく、裏込めによる調整を用いずに葺石表面を揃えるための方法と考えられる。葺石を積み上げる際の裏込めは検出されていない。厳密な場所は特定できていないが、葺石崩落部の観察から、2段目斜面中に地山と盛土の境界がある。

2段目平坦面 2段目平坦面は盛土成形によって構築されている。斜度は 8° 、幅は1.1mで、他の平坦面と比較すると大振りな長径25cm程度の礫を多用し敷き詰めている。そのため礫間が開き気味で面の揃いも悪い。2段目平坦面と1段目斜面を区画する石列は、前述のように平坦面に使用される石材が大振りであることもあり判然としない。

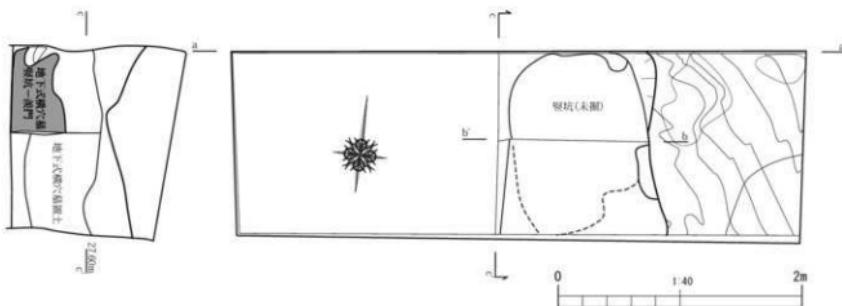
3段目斜面 3段目斜面の基底石は、長径25cm程度の礫を横置きにしているが、2段目平坦面の礫敷が同程度の大きさであるため、視覚的な効果は希薄である。基底石から斜度 26° で立ち上がり、標高34.2m付近では斜度 17° に角度が変化する。ただし屈曲というよりは、弧を描きながら徐々に角度を緩める形状である。水平距離14.6m、斜距離15.5m、高さ5.4mを測る。

葺石は長径5cmから30cm程度と様々な礫を用いている。小口積み、長手積みが混在する状況であるが、2段目斜面と同様に葺石表面を揃えるため、大振りの礫を長手積みにする傾向がみられる。斜面上位になり傾斜角が緩くなってからは、大振りの礫も小口積みする箇所がみられる。下位に大振りの礫を用いた方が、作業効率面からも土木工学面からも効果的と思われるが、実際には混在していることから、葺石施工以前に礫の選別をおこなわず、採石地もしくは集石地から運び込まれた順に積み上げていたと想定される。

3段目斜面では葺石の縦方向の施工単位が確認された。大径木を避ける形で墳頂に設けた調査区部分のため、0.7mの範囲でのみの確認であるが、明瞭に礫径が異なる状況が認識できる。単位間は区画石列によって区画されるのではなく、目地を通すことによって区画されている。また、3段目斜面の葺石にみられる大きな特徴は、横方向の作業単位が顕著に確認されることで、見かけ階段状を呈する。単位間の距離は、水平距離で1.4mから0.6m、高さで0.6mから0.3mを測る。この横方向の作業単位は、墳丘盛土の施工単位と連動している可能性が高いが、葺石の保存を優先したため断ち割り調査による確認はおこなっていない。



第11図 生目1号墳A調査区土層断面図 (S=1/40)



第12図 生目1号墳A 調査区生目56号地下式横穴墓平面図、立面図 (S=1/40)

墳頂平坦面 墳頂平坦面には10cm以下の小礫が敷き詰められていた。金属製の串を刺して確認したが、厚みをもって敷設されているわけではなく、薄く敷き均した状況である。土層断面図をみると調査区西端付近が10cm程度窪むが、有機質の埋葬施設材腐食に伴うもの可能性も想定される。平坦面の外縁付近に礫が見られないのは、樹根による搅乱のためであり、後述するM調査区の調査事例から、本来は平坦面の外縁端まで礫敷が施されていたことが明らかになっている。

生目56号地下式横穴墓 2号墳との間、墳丘外平坦面において堅坑が検出された。当初は堅坑上の置土を2号墳の墳丘出土と想定していたため、サブトレンチによって墳丘面を確認するために北側を半裁し調査することとした。サブトレンチを掘り下げるにしたがい、2号墳の墳丘がほぼ垂直に立ち上がりこと、礫敷面に達しても下位へと掘り込みが継続すること、その掘り込みが2号墳墳丘立ち上がり付近において済門状を呈したことから地下式横穴墓と判断し、掘り下げを中止した。堅坑は2号墳の墳丘を一部掘り込む形で構築され、その際に1号墳の墳丘外平坦面に敷設された礫敷も僅かではあるが削平している。サブトレンチの土層堆積面観察から、1、2号墳間に10cm以上土が堆積した後に堅坑が掘削されていることが明らかになった。その期間は明確ではないが、1、2号墳が築造され一定の時間を経た後に地下式横穴墓が構築されたと判断できる。堅坑は横方向に長い隅丸長方形と想定され、長軸1.5m前後、短軸0.9mを測る。玄室は2号墳墳丘下に構築されているが、調査をおこなっていないため形状や規模は不明である。墳丘下に玄室を設けるものの、堅坑の規模が小さく、置土の量も少量であることから、生目7号墳の墳丘下に構築された生目18号地下式横穴墓のように大規模な玄室を有するタイプではないと考えられる。また、前述のとおり2号墳が築造され一定の期間を経てから構築されていること、詳細は後述するが2号墳の墳頂から埋葬施設と想定される落ち込みが検出されていることから、墳丘内に玄室を構築するものの、古墳周溝内に寄生するタイプの地下式横穴墓と考えられる。生目古墳群内において類例となる可能性がある地下式横穴墓は、9号墳周溝内の51号地下式横穴墓、32号墳周溝内の45号地下式横穴墓があるが、何れも検出状態で止まっているため詳細は不明である。



第13図 生目1号墳A調査区生目56号地下式横穴墓土層断面図(S=1/40)

(2) B調査区

概要 後円部の中心から墳丘主軸に直交する形で南へ向け設定した調査区で、調査面積は71.51 m²である。後円部南側の形状及び構造を把握することを調査目的とした。

古墳構築後の土層堆積状況はA調査区と比較するとやや薄く、斜面では10cm程度の表土直下で葺石が検出される箇所もあった。一方で墳頂に関してはA調査区と同様に厚い堆積土に覆われ、小礫を敷き詰めた状況が確認された。

墳丘は端部から墳頂までの間に、二箇所の平坦面を設け三段に築かれている。A調査区と異なり、2号墳の影響を受けないため1段目斜面長は2段目斜面長に近い値を示し、1号墳本来の規格を表している。A調査区と比較すると遺存状況は良くないが、斜面には葺石、平坦面には礫敷を施している。

墳丘外平坦面 B調査区では、墳端から幅1.4mの範囲で斜度17°の平坦面が検出されている。本来は更に平坦に近かったと想定されるが、シラスで構成される丘陵斜面を削り出して構築しているため、構築面が流出し現況の形状となったと考えられる。A調査区の調査成果から、礫敷が施されていた可能性があるが、構築面の流出と共に失われている。

墳丘外平坦面より南側は斜度25°で緩やかに下降傾斜するが、3mほど進んだ地点から斜度60°という急角度で2.5m降った後屈曲し、再び斜度17°の緩斜面となる。古墳築造時の墳丘外段築の可能性も想定したが、屈曲部を覆う堆積土の下位までTh-Sが含まれる点、傾斜角が60°に達する点、また後述する1調査区において中世の薬研堀が検出された点を合わせると、薬研堀と同時期に作成された中世の切岸と想定される。

1段目斜面 B調査区における1段目斜面は、崩落により正確な数値は明らかにし得ないが、水平距離5m前後、斜距離6m前後、高さ3.4m前後を測る。斜面は地山シラス層を削り込んで造り出している。斜度38°で墳丘外平坦面から立ち上がり、標高26m付近で斜度24°に変化する。斜面がアーチ状に迫り出しているが、これは本来の形状ではなく、1段目平坦面において確認される地崩れによる迫り出しと考えられる。

葺石はその迫り出しの影響もあり、疎らに遺存している程度であった。使用される礫は長径10cm前後的小振りなものである。葺石の施工方法は、A調査区と同様に明確な裏込めをもたず、斜面角に対して垂直に打ち込むように積み上げている。

1段目平坦面 1段目平坦面も地山シラス層を削り込み構築している。概ね平坦に構築されているが、前述のとおり地崩れによって、2段目斜面基底石から1.4mの地点より南側が、礫敷をほぼ保ったまま斜め下方へずり下がっている。同様の地崩れの状況が1調査区の1段目斜面でも確認されている。地崩れの断面において礫敷下部の構造を確認したが、構築土は用いず地山シラス直上に礫を敷設している。樹根により乱れている箇所もあるが、長径10cm以下の礫を主体として密に平置きで並べている。

2段目斜面 2段目斜面は、水平距離6.7m、斜距離7.3m、高さ3.5mを測る。斜度29°で1段目平坦面から立ち上がる。基底石は周囲の葺石と同規模である長径15cm程度の礫を横置きにしている。葺石が遺存しているのは基底石付近のみで、上位は転落し、墳丘面が露出している。葺石の施工方法は、明確な裏込めをもたず、斜面角に対して垂直に打ち込むように積み

上げている。礫の方向は小口積みのものが主体であるが、長手積みも見られる。斜面上位の葺石が失われているため墳丘の流出が著しい。

墳丘は標高 28.8 m付近から上が盛土構築となっている。地山上位層として検出されるはずのアカホヤ、黒ボク土がB調査区では確認されず、縄文時代早期遺物包含層に相当する黄褐色ローム層の直上に、シラスを主体とした盛土が検出される状況が確認された。

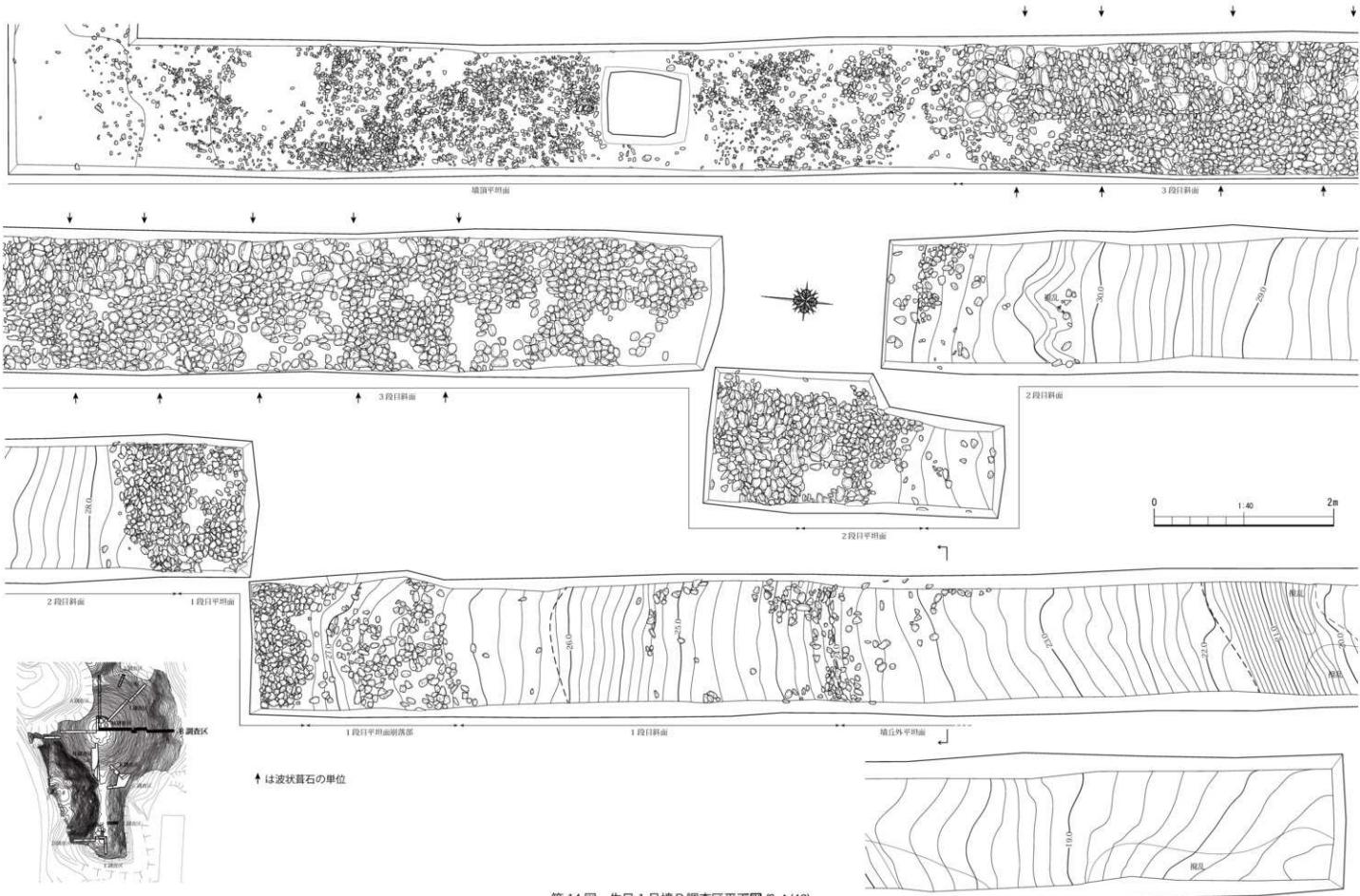
2段目平坦面 2段目平坦面は盛土構築によって形成されている。2段目斜面へと接続する外縁側は崩落しており、3段目斜面基底石から 0.8 m南側の位置までが概ね平坦な状況で検出された。樹根により搅乱を受けている箇所が多いが、長径 10cm 前後の礫を平置きに敷設している。

3段目斜面 3段目斜面は、水平距離 13.7 m、斜距離 14.8 m、高さ 5.7 mを測る。2段目平坦面から斜度 26°で立ち上がり、標高 34.4 m付近で斜度 20°に角度を緩める。更にそこから墳頂平坦面に近づくにつれ角度を緩めていき、最終的には斜度 12°で墳頂平坦面と接続する。そのため2段目平坦面から墳頂を見上げると、3段目斜面がドーム状に見える。

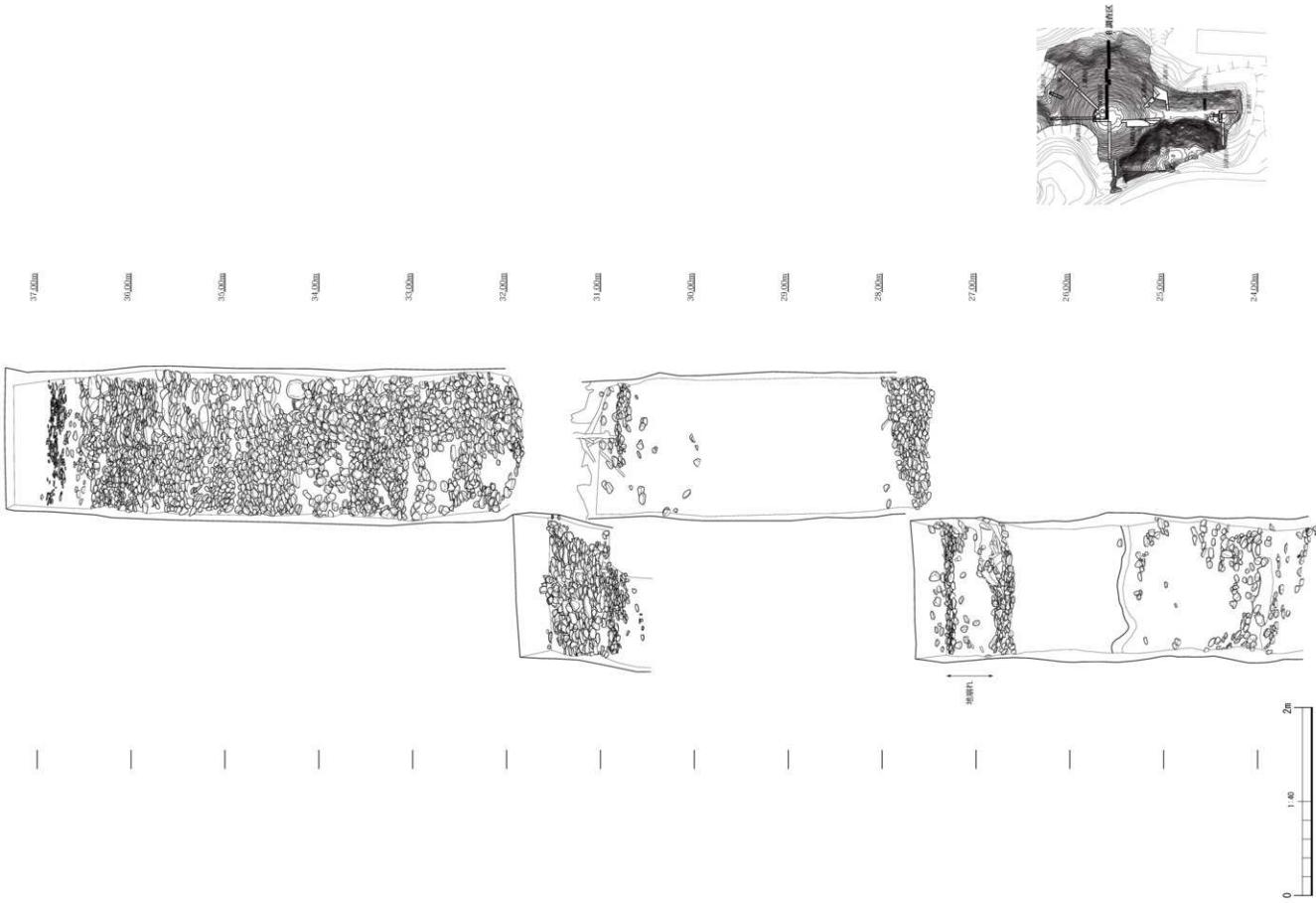
葺石は樹根の影響などにより抜け落ちている箇所もあるが、基本的には基底から墳頂まで遺存している。明確な基底石ではなく、特に東壁側では2段目平坦面から連続的に3段目斜面へと移行する。本調査区では葺石施工における縦方向の施工単位が検出された。施工単位間の区分は区画石列ではなく、目地を通すことによって区分している。本調査区の3段目斜面の葺石に使用される礫は、長径 10cm 程度の小振りなものから長径 35cm に及ぶものまで多彩である。ただし、前述した施工単位毎にその傾向は大きく異なっており、大型の礫を使用するのは東側の施工単位のみであり、西側の施工単位では 20cm 以下の礫しか使用しない。このことから施工単位毎に使用する石材が決まっており、施工単位を超えての石材のやり取りはおこなわれなかつたと考えられる。両施工単位共に基本的に小口積みによって葺石を施工するが、大型の礫は長手積みされる傾向にある。これはA調査区で確認されたものと同様に、機能的なものではなく、裏込めによる調整をおこなわない状況下で、葺石表面を揃えるためのものと考えられる。

施工単位を超えて共有される特徴としては、A調査区の3段目斜面でも確認された横方向の作業単位が挙げられる。A調査区では階段状に明瞭に確認されたが、本調査区では葺石の遺存状況が悪いためもあるが、低いアーチが連続するように見える。作業単位の間隔は、水平距離で 1 m 前後、高さ 0.5 m 前後である。

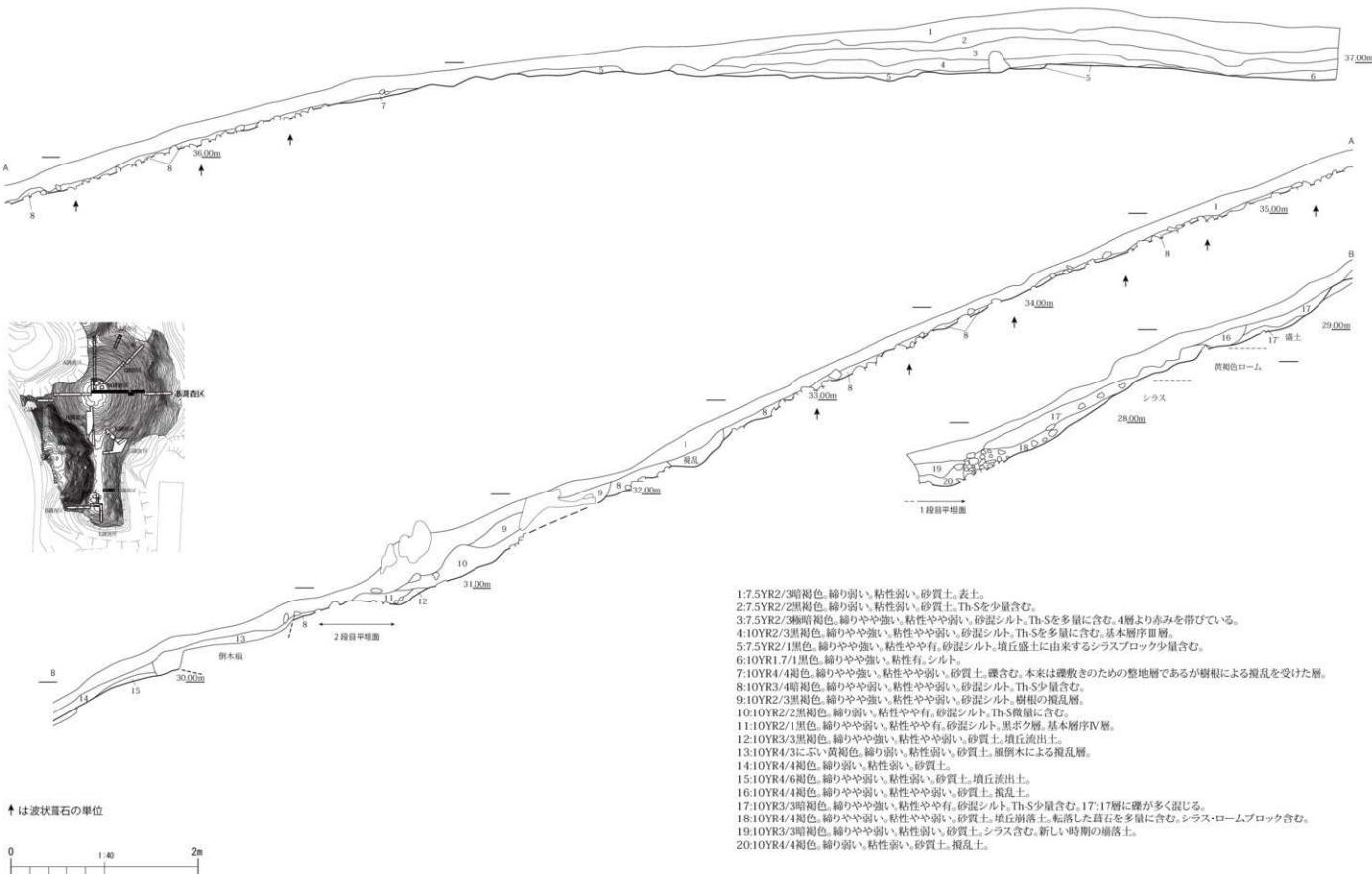
墳頂平坦面 墳頂平坦面には 10cm 以下の小礫が敷き詰められていた。金属製の串を刺して確認したが、A調査区と同様、厚みをもって敷設されているわけではなく、薄く敷き均した状況である。後円部中心寄り西壁付近において、10cm 程度の礫が集中する区画が検出されているが、不整形であることから敷設時の区画ではなく、礫運搬時の 1 単位を示しているものと思われる。土層断面図をみると A 調査区と同様に後円部中心付近が僅かに窪んでおり、有機質の埋葬施設材腐食に伴う陥没の痕跡である可能性が想定される。遺物は礫敷直上から土師器小片が出土した。土師器は墳頂部祭祀に伴うものの可能性もあるが細片のため図化や器種の判別ができなかった。



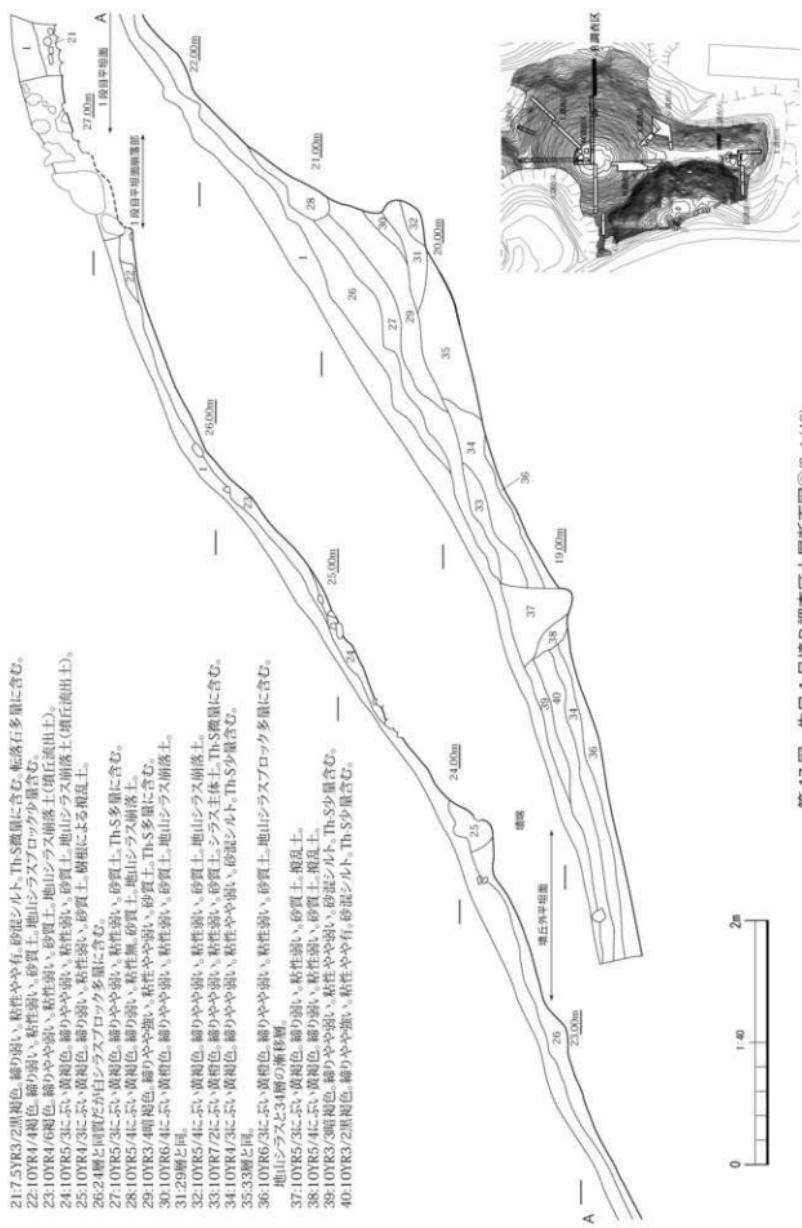
第14図 生目1号墳B調査区平面図 (S=1/40)



第15図 生目1号墳B調査区立面図 (S=1/40)



第16図 生目1号填B調査区土層断面図①(S=1/40)



第17図 生目1号墳B調査区土層断面図②(S-1/40)

(3) C調査区

概要 後円部の中心から墳丘主軸に直交する形で北側に設定した調査区である。後円部を大きく削平している崖を避けるため、途中で調査区を分割し、2m西へ平行移動させ、墳端の検出が想定される位置まで延長した。上段調査区と下段調査区を合わせた調査面積は48m²である。

古墳構築後の土層堆積状況がA、B調査区と比較すると悪く、墳頂平坦面では黒ボク土がほとんど残存していなかった。また2段目斜面以下も墳丘面の直上にTh-Sを含有する土が堆積しており、葺石もほとんど遺存していない状況であった。

1段目斜面 C調査区では、墳丘の流出により墳丘外平坦面は確認することができなかつた。墳端は傾斜変換点として検出されたが、基底石は流出し失われていた。葺石も1段目斜面はすべて流出し、墳丘面が露出していた。墳丘は地山シラスを成形することによって造作している。1段目平坦面もほぼ失われているため、規模の把握も困難であるが、水平距離約6m、斜距離約7.5m、高さ約3.9mに復元される。検出面における墳丘傾斜角は33°を測る。

1段目平坦面 前述のように、平坦面はほぼ失われていたが、2段目斜面の基底石が一部遺存していたことから位置の把握ができた。僅かに礫が検出されたが、遺存している数が少數のため、平坦面に敷設されていたものか2段目斜面からの転落か判断することが困難である。

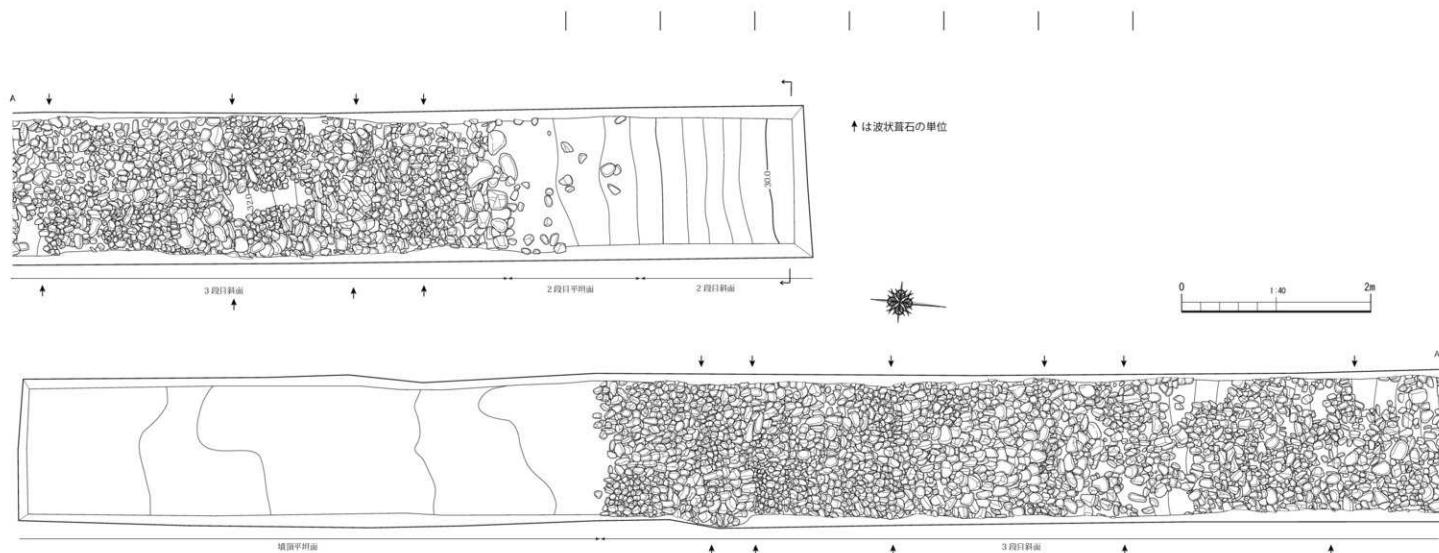
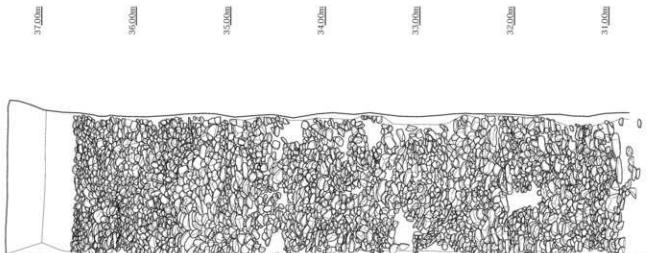
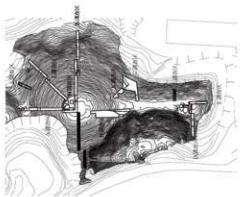
2段目斜面 基底石と葺石が僅かに遺存しているが全般的に残りが悪い。水平距離5.1m、斜距離7m、高さ3.1mを測る。基底石は1石のみ遺存しており、長径15cmで横置きにしている。葺石は小口積みが基本のようである。墳丘は地山成形により構築されているが、標高30.3m付近まではシラス、そこより上位は橙褐色ロームである。また30.7m付近から上位は盛土構築である。B調査区と同様にアカホヤ、黒ボク土層は確認されなかつた。

2段目平坦面 2段目平坦面は盛土構築によって形成されている。3段目斜面基底石から北へ0.7mまではほぼ平坦な状況が確認されたが、本来幅は傾斜の状況から1.4m程度であったと想定される。平置きの礫が散在しており、礫が敷設されていたものと考えられる。

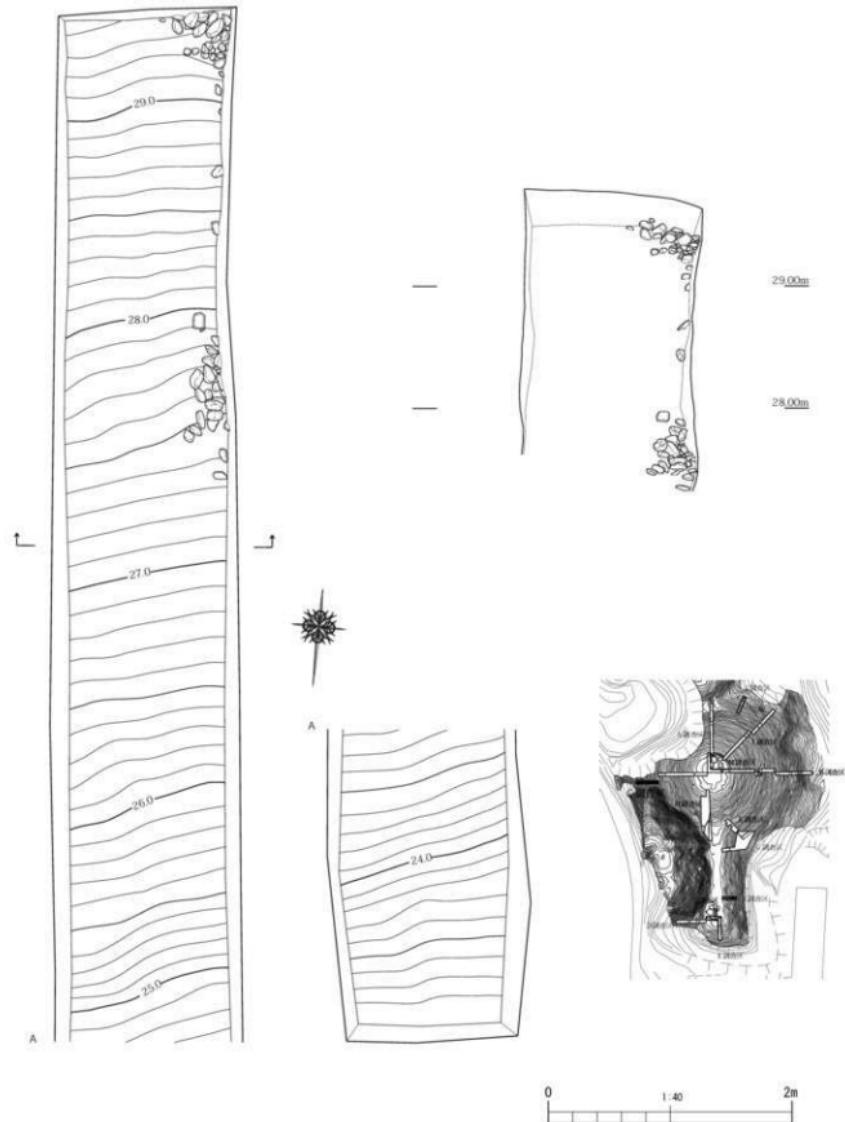
3段目斜面 2段目平坦面までは異なり、3段目斜面の遺存状況は比較的良好である。規模は、水平距離14m、斜距離15.1m、高さ5.7mを測る。2段目平坦面から斜度24°で立ち上がり、標高35m付近では斜度20°となり、墳頂付近では斜度17°まで角度を緩め墳頂平坦面と接続する。A調査区、B調査区と同様に、3段目斜面は直線的ではなく弧を描きながら構築されており、ドーム状を呈する。また、基底石付近は斜度18°と緩やかに立ち上がる。

基底石はやや乱れている部分もあるが、長径30cm前後の礫を横置きにすることを基本としている。C調査区の基底石の特徴は、基底石上に葺石が載らない点である。葺石は基底石背面から積み上げられ、その押さえのような形で基底石を配している。背面の最下段の礫も西側では長径20cm前後とやや大振りの礫を用いており、そこから上位は長径25cmから5cm程度の礫を小口積みと長手積みを併用しながら積み上げている。やはり葺石表面を揃えるため、大型の礫を長手積みする傾向が見られる。

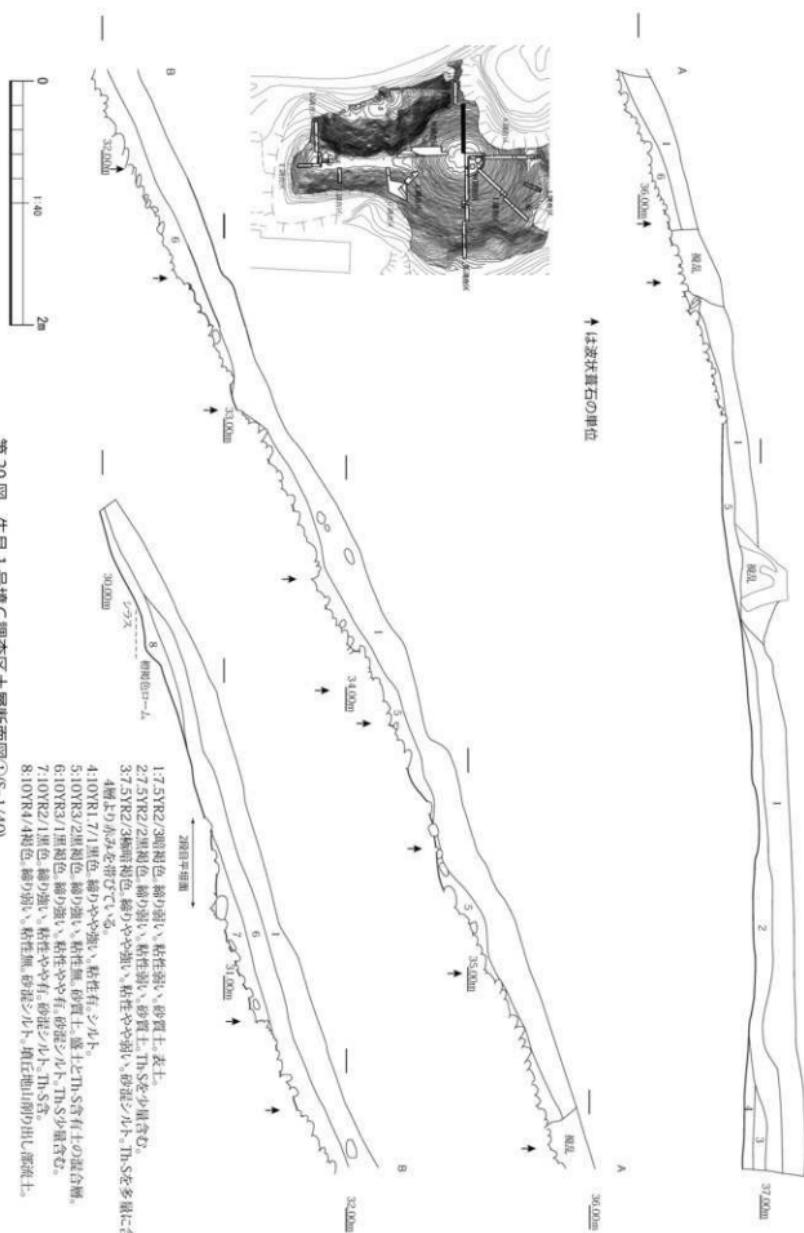
B調査区ほど使用石材の大きさに差が見られないため明瞭ではないが、本調査区でも縦方向の施工単位が検出された。基本的に施工単位間の区画は区画石列ではなく、目地を通すことによって区画している。B、C調査区共に、墳丘主軸に直交する調査区であるが、施工区画は、



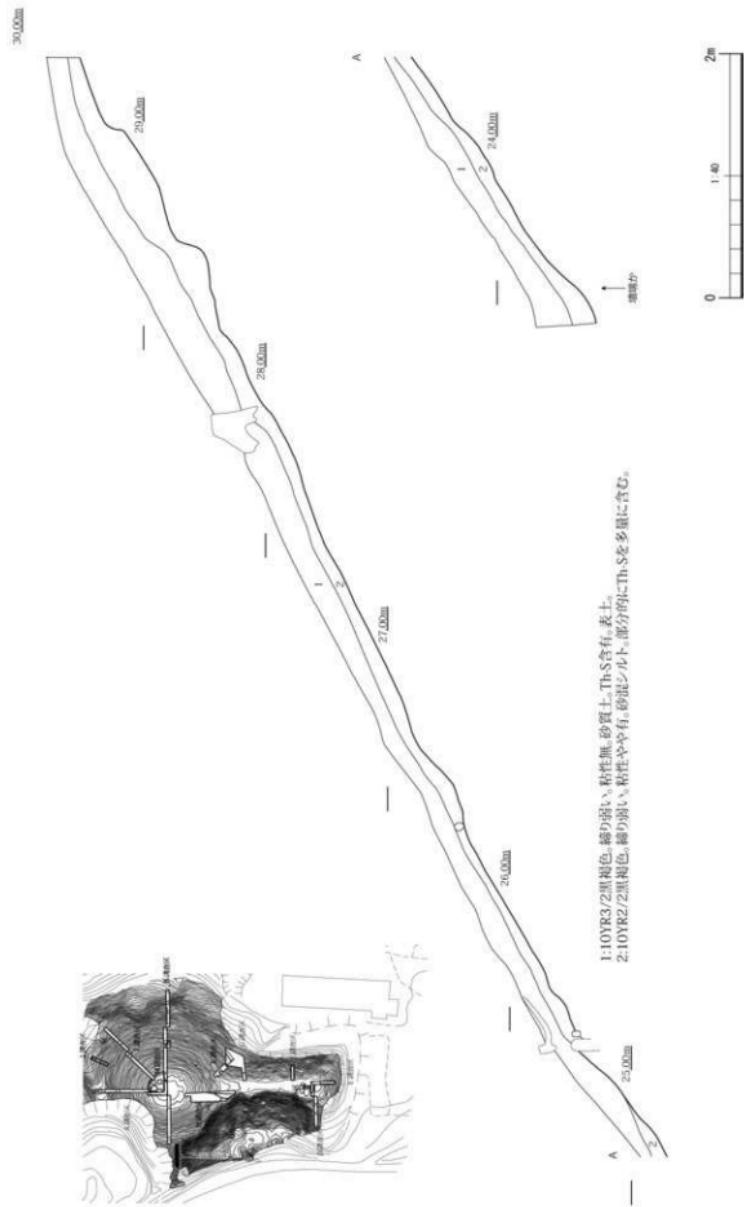
第18図 生目1号墳C調査区平面図、立面図①(S=1/40)



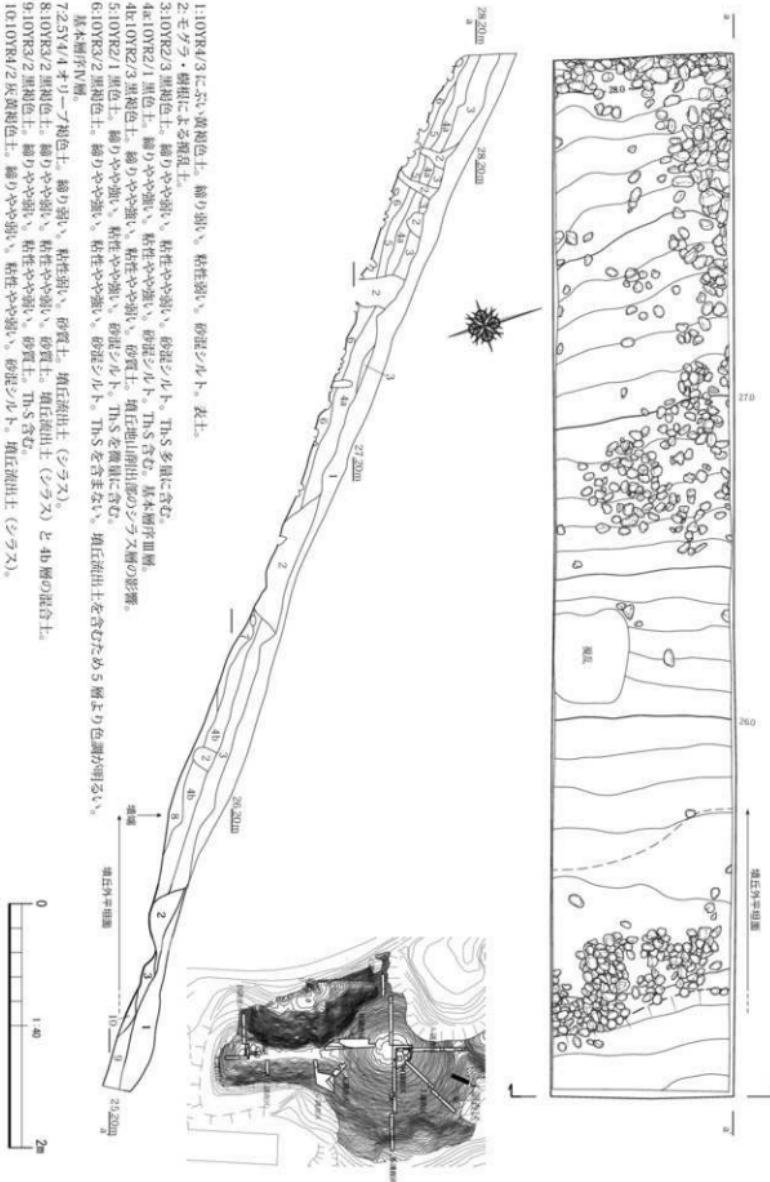
第19図 生目1号墳C調査区平面図、立面図②(S=1/40)

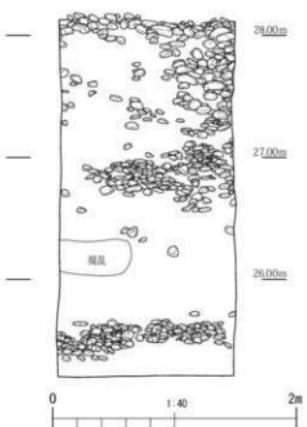


第20図 生目1号墳C調査区土層断面図①(S 1/40)



第21図 生目1号墳C調査区土層断面図(2)(S=1/40)





第23図 生目1号墳J調査区立面図(S=1/40)

向かってカットされるような状況にあることから、Th-S 降灰後に後円部北側の一部分において削平を受けた可能性が高い。本来は後円部墳頂全面に小砾が敷設されていたと考えるのが妥当である。

(4) J調査区

概要 本調査区は、後円部中心から墳丘主軸を基準に南へ 25° 振った位置に設定した調査区で、後円部墳丘端を検出することを目的としたため、調査範囲は墳丘端付近に限定した。調査面積は 11.37 m^2 である。調査の結果、墳丘外平坦面、1段目斜面を検出したが、葺石の遺存状況は良くなかった。

墳丘外平坦面 平坦面は地山シラスを成形し造られており、検出された幅は1.4mで、長径15cm以下の砾が外縁側で検出された。検出された砾の上には、小口が上を向いていたりと方向がばらばらで、面も揃わない明確な転落石が堆積していた。その砾を外すと下から平置き状態の比較的面が揃った前述の砾が検出された。当初は平置きであり面も揃っていることから、砾敷の可能性も考え図化もおこなった。しかし、通常残りが良い斜面側が流失し、外縁側のみ遺存するということは考え難いため、これらの砾は転落石と判断した。

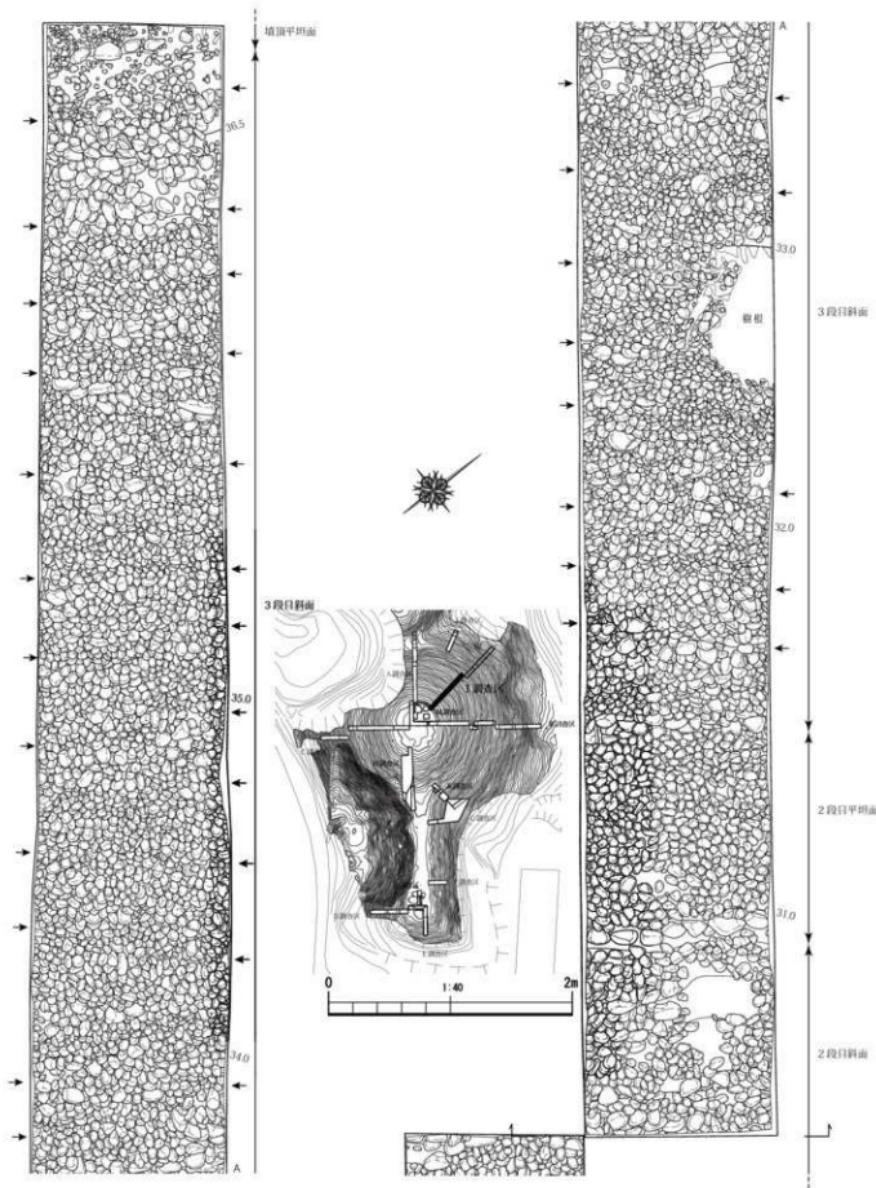
1段目斜面 地山シラスを成形することによって墳丘としている。基底石は失われているが、墳丘外平坦面から斜度 22° の角度で立ち上がる。他の調査区の墳端と比較すると角度が緩やかである。これは本調査区の位置が、2号墳との関係上、制約を受け変形していた後円部が本来の規格へと変化する箇所に当たることから、やや間延びした形となっているためと思われる。

葺石の残りは全般的に良くないが、遺存している箇所をみると、長径15cm以下の砾を斜面角に対して垂直に打ち込むような形で積み上げている。他の調査区と同様、裏込めは確認されていない。

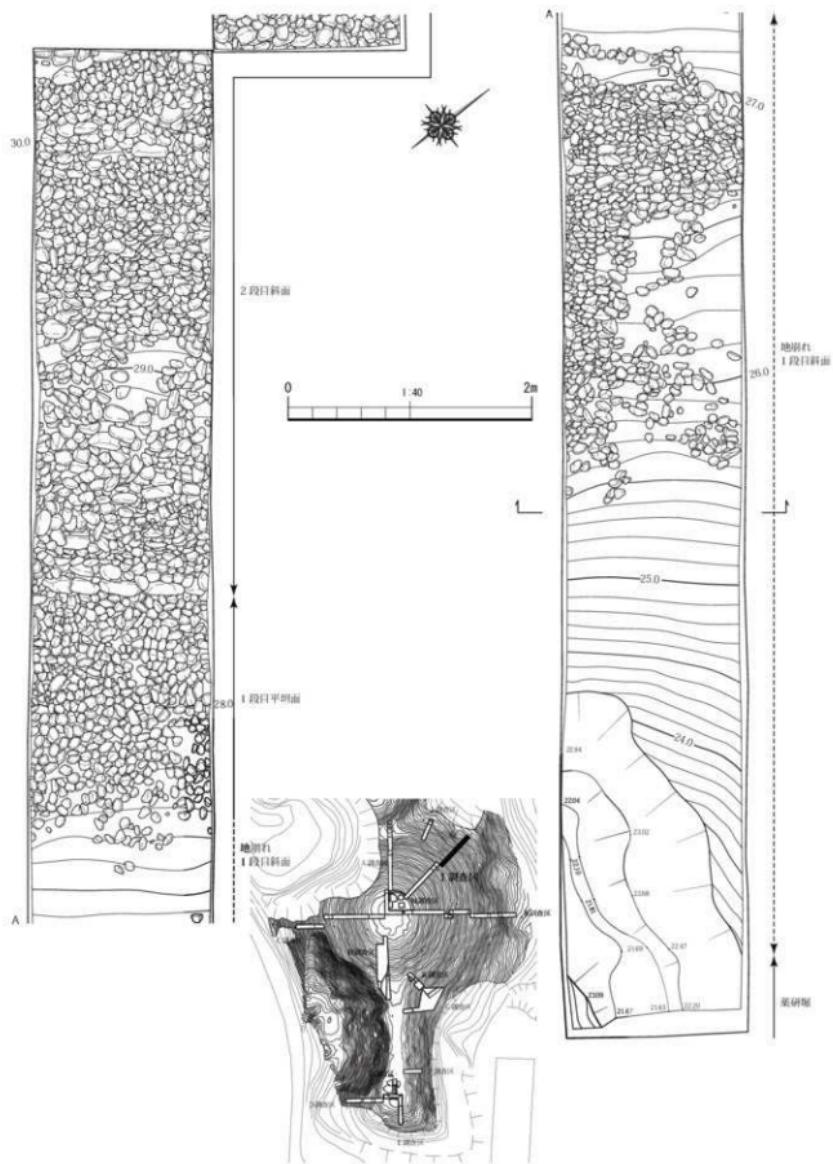
2段目平坦面から後円部中心を見上げた際に左上がりを呈する。B調査区ほど顕著ではないものの、隣り合う施工単位で異なる大きさの砾を使用している箇所が確認できる。また、斜面上位では周囲の葺石と同規模の石を直線的に積み並べて区画石としている箇所も見られる。

本調査区においても3段目斜面において横方向の作業単位が顕著に確認できた。細かなアーチの連続のような形で検出され、間隔はばらつきがあるが、基本単位は水平距離1m前後、高さ0.5m前後と思われる。

墳頂平坦面 本調査区の墳頂平坦面においては、A、B調査区と異なり小砾の敷設が確認されなかった。顕著な搅乱は見られないが、A、B調査区に比べて10cm前後レベルが低くなっていることと、3、4層の堆積が北側に



第24図 生目1号墳I調査区平面図①(S=1/40)



第25図 生目1号墳I調査区平面図②(S=1/40)

(5) I 調査区

概要 後円部の中心から墳丘主軸を基準に南へ45°振った位置に設定した調査区である。大径木を避けるため調査区をずらし、墳端の検出が想定される位置まで延伸した。上段調査区と下段調査区を合わせた面積は44.38 m²である。

本調査区の1段目斜面より上部は、葺石の残りが良い1号墳の中でも、最も良好な状態で葺石が検出された。特に3段目斜面は築造当時の姿を完全に近い形で残しており、掘り下げ途中も転落石がほとんどなかった。その一方で、1段目平坦面以下においては、1段目斜面で地崩れが確認され、墳端付近は中世の薬研堀によって削平を受けるなど、築造当時の状況は失われていた。

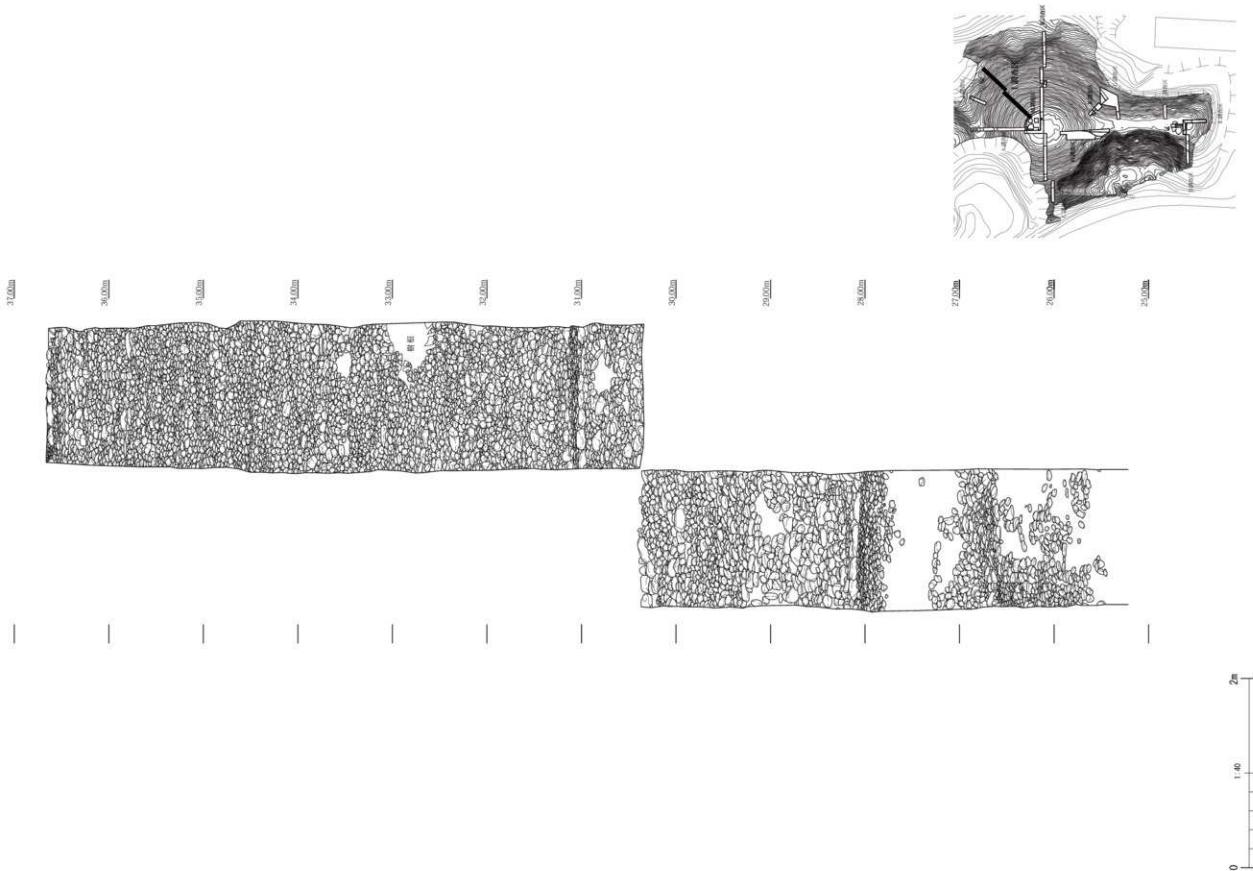
1段目斜面 前述のとおり、1段目斜面の基底部は、墳丘外平坦面と共に薬研堀によって削平され失われている。そのため墳端位置も明確ではなく規模は不明である。また傾斜角に関しては、1段目平坦面途中から地崩れを起こしているため本来の角度ではない。葺石は地崩れを起こしているにもかかわらず、一部で設置状況を保ったまま検出された。ただし、表層が円弧を描くように崩れたため葺石小口面が上方を向いてしまっている。葺石の積み方は他所と同様で裏込めを設けず、墳丘面に垂直に打ち込むように積み上げられている。小口積みを基本とするが、長径20cm程度のやや大振りな礎は、葺石表面を揃えるため長手積みをしている。墳丘は地山を成形することで造り出しており、標高26.7m付近まではシラス、そこから上位は黄褐色（層位的に橙褐色ローム層と同一。場所により色調が異なる）ローム層となっている。

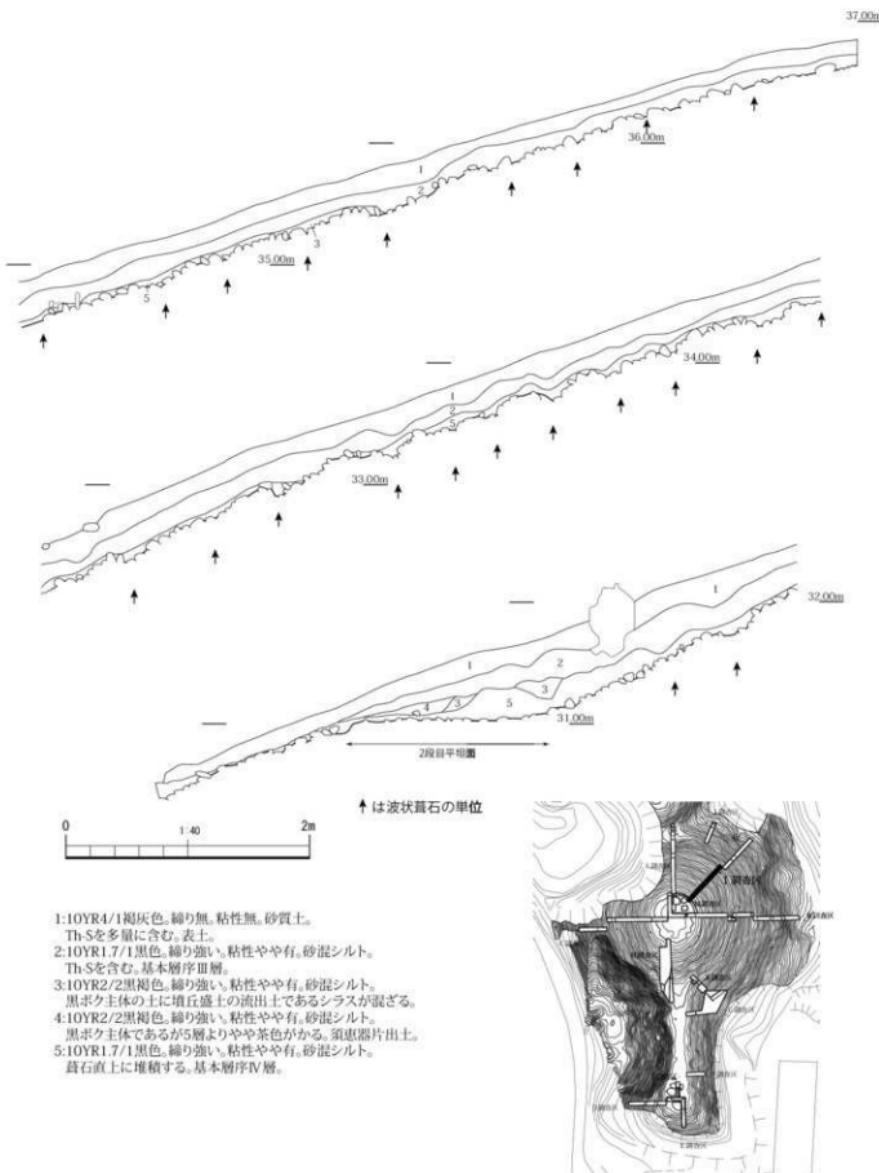
1段目平坦面 2段目斜面基底石から南東へ1.1mまでは斜度4°とほぼ平坦、1.1mから1.8mまでは斜度17°と傾斜がきつくなるが、礎が平置きされていることから、本来はこの範囲が1段目平坦面と考えられる。傾斜角がきつくなるのは1段目斜面の地崩れの影響である。敷設される礎は長径15cm以下で、非常に密に並べられ面も揃っている。1段目平坦面は地山成形により造り出されている。

2段目斜面 標高29m付近で乱れが見られるが、葺石の遺存状況は概ね良好である。規模は水平距離6m、斜距離6.4m、高さ2.9mを測る。基底石は長径30cm程度の礎を横置きにする。上位の葺石は基底石上から積み上げず、基底石背面から積み上げられる。基底石背面の葺石立ち上がり角度は斜度14°であるが、0.3mほど進んだ位置から角度を変え、斜度31°で積み上げられる。C調査区3段目斜面で確認された積み方と同じであり、基底石が背面の葺石を押さえ込む形を探る。葺石に使用される礎は、長径30cmから5cm程度とばらつきが見られる。小型の礎は小口積みされるが、他所と同様、長径20cm程度の礎から長手積みされる傾向があり、葺石表面を揃える意識が窺える。標高29.5m、30m付近に横方向の作業単位が確認される。特に30m付近の作業単位は長径20cm前後の礎を横並びに配しており明瞭である。葺石の遺存状況がよく墳丘面が確認できないが、地山成形と盛土構築の境界がこの付近と想定されることから、盛土構築と連動した3段目斜面で見られる横方向の作業単位と同一のものと考えられる。

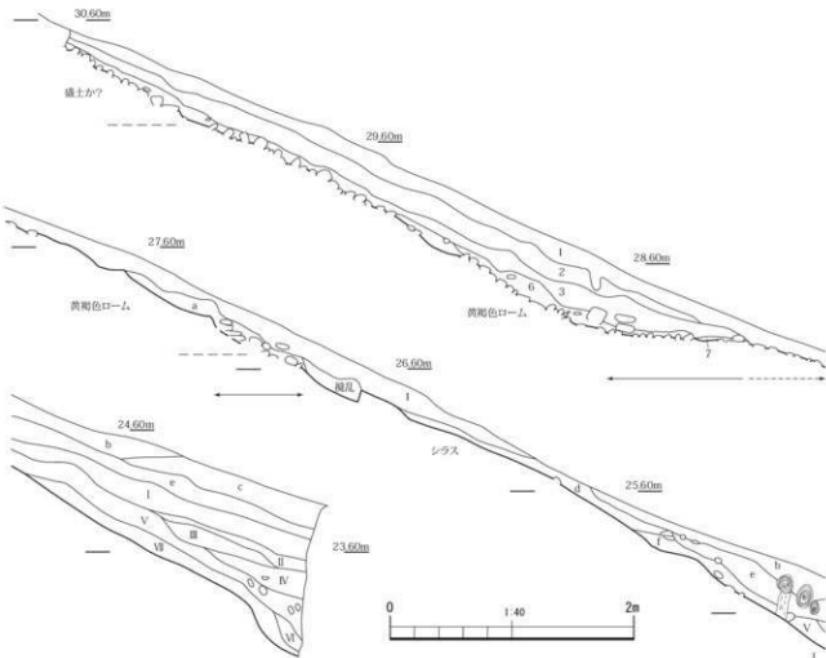
2段目平坦面 僅かに樹根によって礎敷が乱されているが、区画石列を含めほぼ完存している。3段目斜面の基底石から外縁端の区画石列までの幅は1.7mを測る。区画石列には最大で長径30cmの礎を用いて横置きにし、2段目斜面との区画としている。また、平坦面の礎敷には長径

第26図 生目1号墳 | 調査区工面図 6(140)





第27図 生目1号墳I調査区土層断面図①(S=1/40)



1~5層は第27図参照。

6:10YR2/2 黒褐色。繰りやや強い。粘性やや有。砂混シルト。

地山黄褐色ローム層と地山黄褐色ロームの混合層。

7:10YR5/8 黄褐色。繰りやや弱い。粘性強い。シルト。地山黄褐色ローム層の流失土。

a:7.5YR2/2 黒褐色。繰りやや弱い。粘性やや有。砂混シルト。

地山黄褐色ローム含む。黒ボクと地山黄褐色ロームの混合層。地崩れによる堆積層。

b:10YR4/3cにぶい 黄褐色。繰りやや弱い。粘性やや有。砂混シルト。

Th-S少量含む。表土。

c:10YR4/3cにぶい 黄褐色。繰りやや弱い。粘性やや有。砂混シルト。

Th-S中量含む。表土。

d:10YR3/3暗褐色。繰りやや弱い。粘性やや弱い。砂質土。

シラス・径5cm程度のシラスブロック少量含む。地崩れによる流出土。

e:10YR3/2 黑褐色。繰り強い。粘性弱い。砂混シルト。Th-S多量に含む。

f:10YR4/3cにぶい 黄褐色。繰りやや弱い。粘性弱い。砂質土。シラス多量に混ざる。

g:1:10YR2/1 黒色。繰り強い。粘性弱い。砂混シルト。Th-S主体の層。薬研堀埋土。

h:1:10YR1.7/1 黒色。繰りやや強い。粘性やや有。砂混シルト。Th-S少量含む。薬研堀埋土。

i:1:10YR3/2 黑褐色。繰りやや弱い。粘性やや有。砂混シルト。

アカホヤ多量に混ざる。Th-S少量含む。薬研堀埋土。

j:1:10YR1.7/1 黑色。繰りやや強い。粘性やや有。砂混シルト。

径3cm程度のシラスブロック微量含む。薬研堀埋土。

k:1:10YR2/1 黑色。繰りやや弱い。粘性やや有。砂混シルト。

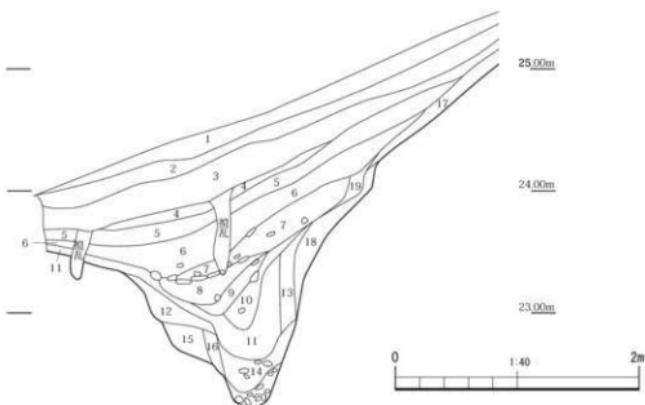
径3cm程度のシラスブロック少量含む。薬研堀埋土。

l:1:10YR2/3 黑褐色。繰りやや強い。粘性弱い。砂質土。シラス多量に混ざる。薬研堀埋土。

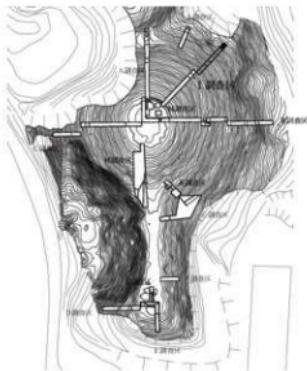
m:地山シラスの崩落上層。黄色、砂質が強い白色が混ざる。薬研堀構築後の地崩れ層。



第28図 生目1号墳I調査区土層断面図②(S=1/40)



- 1.7.5YR3/2黒褐色。繊り弱い。粘性やや弱い。砂混シルト。Th-S含む。表土。
 2.10YR2/1黒色。繊り弱い。粘性やや弱い。砂混シルト。Th-S含む。
 3.7.5YR1.7/1黒色。繊りやや強い。粘性やや弱い。砂混シルト。Th-S多量に含む。
 4.10YR1.7/1黒色。繊りやや強い。粘性やや弱い。砂混シルト。
 Th-S少量含む。アカホヤ微量に含む。
 5.アカホヤ(二次堆積)と7.5YR3/1黒褐色砂質土の混合層。繊りやや強い。
 粘性やや弱い。砂質土。
 6.7.5YR1.7/1黒色。繊り有。粘性やや弱い。砂混シルト。
 シラス面が近い箇所はやや色調が明るい。Th-S微量に含む。
 7.7.5YR2/1黒色。繊り強。粘性やや弱い。砂質土。Th-S少量含む。
 8.10YR1.7/1黒色。繊りやや弱い。粘性弱い。上層に多量に転落礫を含む。
 9.10YR1.7/1黒色。繊りやや弱い。粘性やや有。砂混シルト。Th-S微量に含む。
 10.10YR3/1黒褐色。繊りやや弱い。粘性やや弱い。砂混シルト。
 径1cm程度のシラスブロック少量含む。
 11.10YRA/2灰黄褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。
 シラス混ざる。径10cm以下のシラスブロック少量含む。
 12.10YR4/3にぶい黄褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。
 上層の影響で土色が黒ずむ。
 13.2.5Y8/4淡黄色。繊りやや強い。粘性弱い。砂質土。
 シラス主体土。9・10層ブロックが所々に混ざる。
 14.2.5Y8/4淡黄色。繊りやや強い。粘性弱い。砂質土。
 地山シラス崩落土。上層ブロックが所々に混ざる。
 15.2.5Y8/4淡黄色。繊りやや強い。粘性弱い。砂質土。
 地山シラス崩落土。地山シラスと非常に近似しているが、層中に転落疊合む。
 16.7.5YRA/2灰褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。
 転落疊を多量に含む。
 17.2.5Y8/4淡黄色。繊りやや強い。粘性弱い。砂質土。
 シラス主体土。9・10層ブロックが所々に混ざる。
 18.2.5Y8/4淡黄色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。
 シラス主体土。黒色土が所々に混ざる。
 19.17・18層の混ざり。
 20.2.5Y8/4淡黄色。繊りやや強い。粘性無。砂。転落疊多量に含む。



第29図 生目1号墳I 調査区薬研堀土層断面図 (S=1/40)

15cm程度の礫が用いられ、面を揃え密に敷き均している。平坦面上の土層堆積は良好で、基本層序IV層の黒ボク土（第27図5層）も確認される。第27図4層から須恵器片が出土しているが、礫敷面との間には前述の5層が堆積していることから、確實に1号墳に伴う遺物とは言い難い。

3段目斜面 僅かに樹根による搅乱が見られるが、そこを除けば葺石が完存していた。規模は水平距離 15 m、斜距離 16 m、高さ 5.5 m を測る。傾斜角は基底石から斜度 26°で立ち上がり、標高 33.3 m 付近で斜度が 19°と傾斜が緩くなり、墳頂付近では斜度 13°まで角度を緩める。基底石は長径 20cm 程度の礫を横置きにし、その上から葺石を積み上げていく。2段目平坦面の外縁角の区画石列に用いられた礫のほうが規模が大きく、3段目斜面中にも同規模の葺石が見られることから、基底石の視覚的な効果は低い。葺石は他の調査区と同様に小口積みを基本とし、大振りな礫を長手積みにして、葺石表面を平滑にする意識が見られる。礫のサイズは 20cm から 5cm である。本調査区で検出された葺石は、1号墳の全調査区の中で一番丁寧に施工しており、非常に緻密に積み上げている。横方向の作業単位も最も明瞭に確認でき、作業単位毎に円弧を描くように積み上げられていることから波状に見える。間隔はばらつきが有り、水平距離 1m から 0.3m 程度のものまである。他の調査区より単位が細かく見えるが、遺存状況が良く作業単位を捉えやすかったためとも考えられる。この波状の単位が葺石上の堆積土の土留めになったためか、斜面にもかかわらず基本層序IV層の黒ボク土が葺石を覆っていた。通常は斜面のため流出してしまった黒ボク土が残り、それに覆われたことが非常に良好な遺存状況に繋がった可能性もある。

墳頂平坦面 墳頂平坦面は極一部しか調査していないが、平坦面外縁角において 3段目斜面との区画石列が検出された。石列は長径 25cm から 15cm の礫を横置きに配置する。周囲の葺石や礫敷に使用されている礫が長径 10cm 以下であることから視覚的効果も十分に有する。

薬研堀 調査区南東端で検出された。上端幅 2.8 m、深さ 1.7 m、墳丘側の傾斜角 66°、斜面下方側の傾斜角 49°を測る。深さは 1.7 m であるが、墳丘側はそのまま斜面が継続するため、十分な防護機能を有していたと考えられる。地山シラスを掘り込んで構築しているため、堀底面付近はシラス流土が堆積している。また礫も多量に含んでおり、薬研堀を掘削する際に墳丘外平坦面や 1段目斜面を削平した可能性が高い。この薬研堀は、後円部南東方向から続く尾根を切断する役割で掘削されたものと考えられ、B調査区で検出された切岸に接続すると思われる。

(6) M調査区

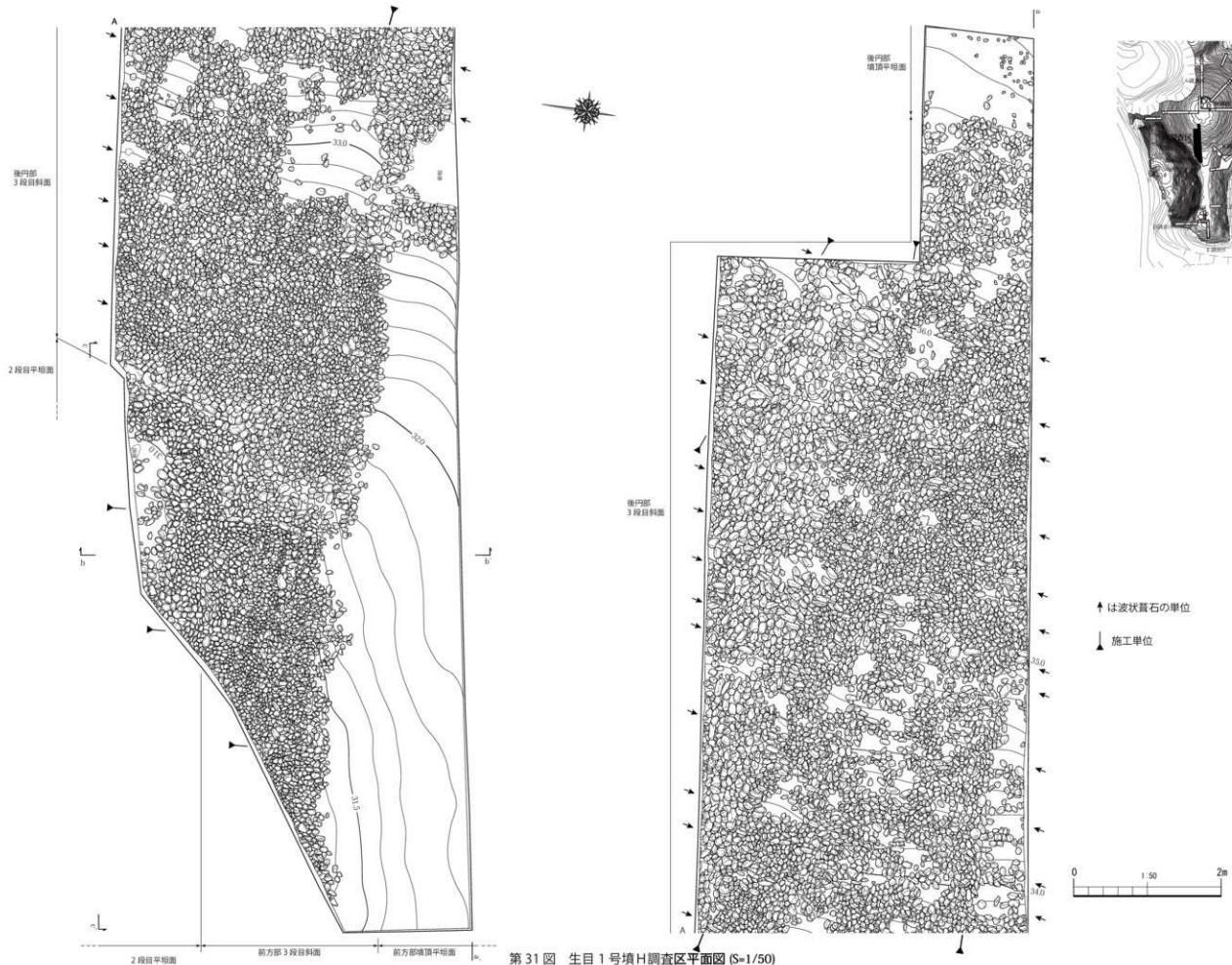
概要 1調査区において確認された、墳頂平坦面外縁端の区画石列を広範囲で検出することと、後円部墳頂平坦面における土器祭祀の有無を確認するために設定した調査区である。大径木を伐採しない方針で調査をおこなったため、変則的な調査区形状となっている。調査面積は 54.4 m² である。

調査の結果、後円部墳頂平坦面外縁端の区画石列は、築造当初から一部にのみ施工されていくことが明らかになった。これは葺石の構築技法が縦方向の施工区画によって厳守されたことに起因するもので、隣接する区画でも構築技法が大きく異なる事例が確認された。また、後円部墳頂平坦面の 4 分の 1 程度を調査したにもかかわらず、出土した遺物は僅かな土師器細片のみであり、大規模な土器祭祀はおこなっていないと考えられる。

3段目斜面 斜面上端付近のみの検出であるが、縦方向の施工単位が明瞭に確認できた。本調査区に A、B 調査区を加えた範囲内において、9箇所の施工単位が検出された。またその施工



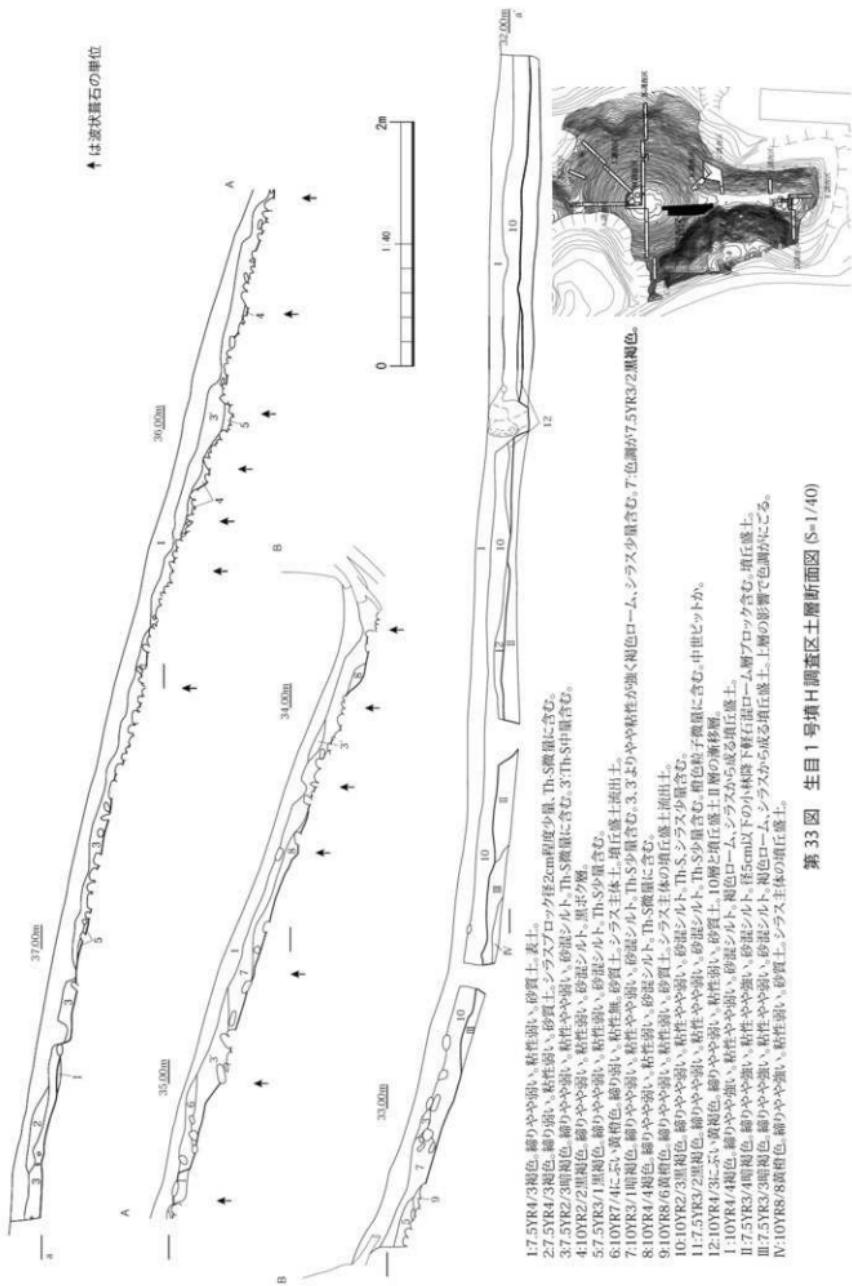
第30図 生目1号墳M調査区平面図、立面図(S=1/40)



第31図 生目1号埴H調査区平面図 (S=1/50)



第32図 生目1号填H調査区立面図 (S=1/40)



第33図 生目1号墳H調査区土層断面図 (S=1/40)

単位を区画する施工小単位も検出された。施工単位の区分は、葺石に使用される礫のサイズや、墳頂外縁端区画石列の有無、3段目斜面上端の設定位置（墳頂平坦面外縁端位置）の差異、単位端部に配される区画石列によって判別することができる。一方、施工小単位は施工単位内において、目地、葺石使用石材の微小な差異によって判別することができる。3段目斜面上端部における施工単位の幅は、1.5 mから2.9 mまでばらつきが見られるが、2 m前後の数値を示すものが多い。

墳頂平坦面 長径10cmから1cm程度の小礫が、一部後世に流出したと思われる箇所を除き全面から検出された。小礫はばら撒いて敷き均したと想定され、多少の厚みを持つ箇所もあるが、金属製の串を刺して確認したところ、その堆積は厚いものではなく5cm以下と想定される。遺物は小礫に混ざるような状況で、墳頂平坦面の中心寄りで土師器小片が少量出土したが、器種等が判別できる資料は出土していない。のことから、土器祭祀がおこなわれていたとしても非常に少量かつ限定的な位置でおこなわれたと考えられる。

第4項 後円部及びくびれ部の調査成果

(1) H調査区

概要 後円部と前方部の接続状況と、2段目平坦面の北側くびれ部位置を明らかにするために設定した調査区である。当初は墳丘主軸に合わせ、前方部墳頂から後円部墳頂に向ける調査区を設定するはずであったが、軸線上に大径木が多数存在したため、北へずらして設定した。また、平成26年度調査において2段目平坦面における後円部と前方部の接続状況の確認が不十分であったため、平成27年度に追加調査をおこなった。調査面積は両年度合計で86.7m²である。

調査では、前方部墳頂平坦面には礫敷がなく、後円部3段目斜面にスロープ状を呈し接続することが明らかになった。また、2段目平坦面は、後円部と前方部で途切れることなく接続するが、両者に高低差があるため、前方部から後円部にかけてスロープ状に標高を上げ接続することが確認された。後円部と前方部の斜面境界となる谷筋は明瞭である。

2段目平坦面 前述のとおり、前方部から後円部へ向け標高を上げながら接続する。調査区内で確認された比高差は約0.4mで斜度は10°である。調査区内において外縁端を確認することができなかったが、調査区のすぐ北側で墳丘が大きく崩落しているため、端部は失われていると想定される。長径15cm以下の礫が密に敷かれており、目地を通すことにより施工単位を区分している。

後円部3段目斜面 表土厚が薄く、樹根等の影響で所々抜けが見られるが、概ね基底石から墳頂平坦面まで葺石が遺存している。規模は水平距離16.3m、斜距離17.1m、高さ5.7mを測る。前方部墳頂平坦面から後円部墳頂平坦面までの規模は、水平距離13.8m、斜距離14.4mを測る。傾斜角は斜度19°で立ち上がり、墳頂に向かうにつれ序々に角度を緩め、墳頂付近の傾斜角は斜度13°である。斜面は直線的ではなく、他の調査区と同様ドーム状である。

基底石は最大で30cm程度の礫を横置きにし、その上方に長径15cmから5cm程度の礫を積み上げる。積み上げ方は他の調査区と同様、基本的に小口積みであるが、大振りな礫は長手積みにする傾向にある。ただし、北側から4番目の施工単位においては、長径20cm程度の礫でも

小口積みにしている箇所があるにもかかわらず、葺石表面を平滑にする意識が働いていることから、通常の斜面に対して垂直に打ち込むように積み上げていく施工方法ではなく、礫を斜面に対して平行に積み上げる施工方法を探っている。縦方向の施工単位は目地を通すことによって区画しているが、葺石が抜け落ちている箇所が多く、判然としない箇所もある。2段目平坦面から後円部墳頂を見上げると、施工単位は右上がりのラインとして見える。これはB調査区、C調査区で確認された施工単位とは逆方向である。横方向の作業単位はB調査区の検出状況と似ており、小規模な円弧が連続するような状況である。

後円部墳頂平坦面 後円部の墳頂平坦面は僅かな範囲のみの調査であるが、長径5cm程度の礫が敷設されていた。ただし大部分の礫が流出しており遺存状況は悪い。墳頂と3段目斜面を区画する石列も検出されなかったが、M調査区の状況を鑑みると、当初から施工されていなかつた可能性もある。

前方部3段目斜面 前方部3段目斜面は、水平距離2.0m、斜距離2.8m、高さ1.0mを測り、傾斜角は斜度22°である。

基底石は、最も後円部寄りの施工単位では、長径20cm程度の礫を横置きにし並べるが、その横の単位では明瞭な基底石をもたず、2段目平坦面から連続的に3段目斜面が構築されている。縦方向の施工単位は区画石列によって区画している。葺石は長径10cmから5cm程度の小振りな礫を中心に使用しており、斜面に対して垂直に打ち込むように積み上げられている。後円部と前方部の接続部では、葺石の重なり具合から後円部葺石が施工された後に前方部葺石が施工されたことが明らかになった。前方部3段目斜面においても横方向の作業単位が確認された。後円部とは異なり表面は直線的に積み上げられるが、横目地を通し、一部に長径20cm程度の周囲よりやや大振りの礫を配する。

前方部墳頂平坦面 後円部墳頂平坦面とは異なり、前方部墳頂平坦面には礫敷が施されておらず、シラス主体土で構成された墳丘盛土が露出していた。前方部から伸びてきた墳頂平坦面は、後円部に向かって斜度13.5°で緩やかに登り、後円部3段目斜面に接続する。接続位置までの両側面は、後円部3段目斜面から隆起する形となり、後円部墳頂まで伸びないものの隆起斜道と捉えてよいと思われる。接続後の後円部3段目斜面は葺石に覆われているが、前方部墳頂平坦面を延長する形で葺石に目地が通っている。また延長部の葺石が周囲の葺石よりも僅かに突出し、一部被さるような状況も確認される。これらのことから、隆起斜道の延長上の葺石は、周囲の葺石よりも後に葺かれている可能性が高い。どの段階で施工されたかを断定することは困難であるが、葬送儀礼完了後に施工された可能性も想定される。

(2) C調査区

概要 後円部と前方部の接続状況と、くびれ部位置の確定、前方部段築状況を明らかにするために設定した調査区である。調査面積は65.5m²を測る。当初は墳端を捉える計画であったが、調査区より南に位置することが明らかになり、拡張も検討したが調査区のすぐ南側が3m程度の崖となっており、既に消失していると判断し、拡張はおこなわなかった。

調査では、くびれ部において後円部1段目平坦面、2段目斜面の礫敷、葺石を検出し、前方部墳頂まで掘削した箇所では前方部3段目斜面の葺石を検出した。

後円部と前方部で葺石の有り方が全く異なっており、後円部は斜面、平坦面共に葺石、礫敷が施されているのに対し、前方部は少なくとも1段目平坦面、2段目斜面に礫敷、葺石が施されていなかった可能性が高い。

後円部1段目斜面 1段目斜面は遺存状況が悪く、葺石は検出されず地山削り出しの墳丘面が検出された。調査区壁から多数の転落石が検出されたことから、本来は葺石が施工されていたと想定される。

後円部1段目平坦面 残存幅1.4mで検出された。一部流出していたものの、平坦面上には長径10cmから5cmの礫を中心敷き詰められていた。また、20cm程度の礫も少数ではあるが含まれる。区画石列を配した縦方向の施工単位が明瞭に確認できる。区画石列は2段目斜面まで連続的に伸びており、平坦面と斜面が一体的に施工されていたと考えられる。

後円部2段目斜面 基底石は長径25cmから15cm程度の礫を横置きにしている。基底石から上は長径20cmから5cm程度の礫を、斜面に対して垂直に小口積みすることを基本としている。他の調査区と同様、大振りな礫は長手積みをしている。1段目平坦面から続く縦方向の区画石列は、長径20cm程度の礫を平置きにする、葺石と同サイズの礫を平置きにする、長径20cm程度の礫を直線状に長手積みにする、という3パターンが確認された。施工単位幅は0.8mから0.6mで、他の調査区で確認されている施工幅より狭い。

前方部1段目斜面 後円部1段目斜面と同様に遺存状況が悪い。葺石は検出されず、地山削り出しの墳丘面も流出、搅乱され、形状が変形している。後円部側と異なり、調査区壁に転落石がほとんど掛かっておらず、築造時から葺石を施していなかった可能性が高い。

前方部1段目平坦面 矾敷は見られず、後円部との接続部付近を除き、流出により形状を失っている。前方部1段目斜面と同様に、築造時から礫敷が施されていなかった可能性が高い。

前方部2段目斜面 後円部2段目斜面とは異なり、葺石は検出されなかった。地山削り出しの墳丘面も、1段目斜面と同様、流出、搅乱を受けている。標高29.2m付近で見られる礫は葺石ではなく、縄文時代早期遺物包含層中の礫である。本調査区では、概ね標高30mまでが地山削り出しにより墳丘を構築し、その上に盛土を施している。

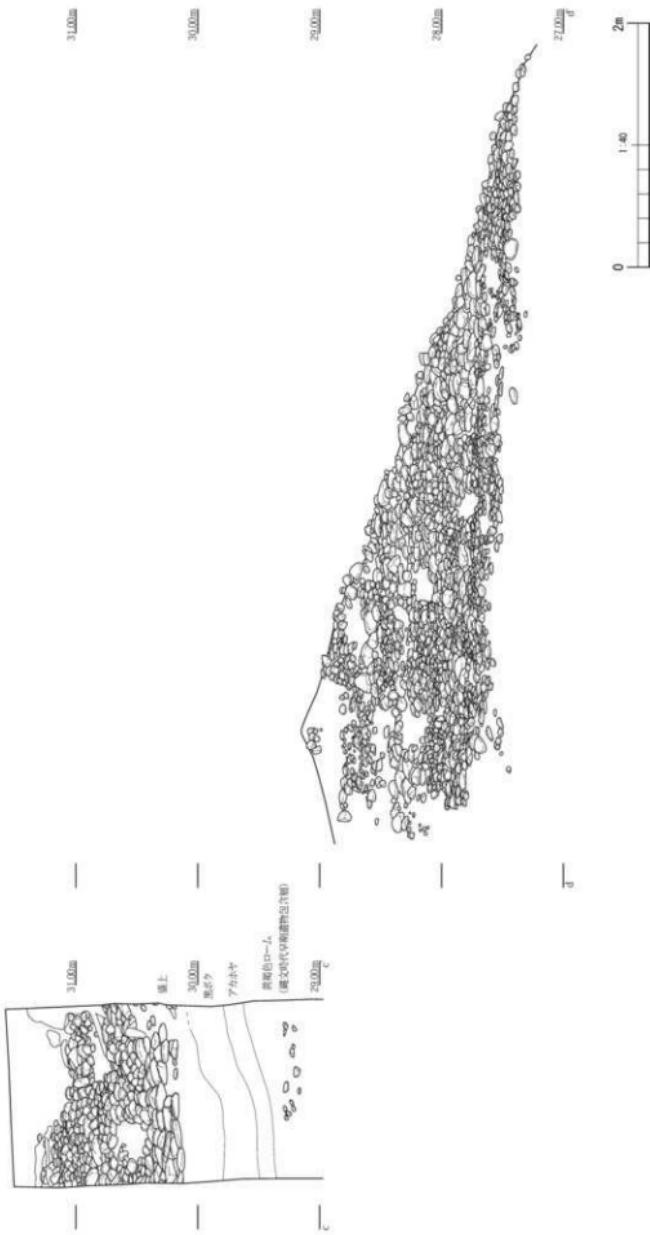
前方部2段目平坦面 2段目平坦面は崩落により失われているが、3段目斜面の基底石が遺存していたことから、標高と位置の把握が可能であった。平坦面の標高は30.1mであり、盛土構築によって形成されていたと考えられる。

前方部3段目斜面 樹根により搅乱されている箇所もあるが、概ね葺石が遺存している。規模は水平距離2.1m、斜距離2.6m、高さ1.2mを測る。傾斜角は斜度27°である。基底石は長径20cm前後の礫を横置きにし、その上には同規模の礫を4段横置きで積み上げる。そのため基底石が5段積みのように見える。その上位は、長径10cmから5cm程度の石を小口積みで積み上げる。一部大振りな礫は、他の調査区と同様、長手積みにする。調査区内において縦方向の施工単位は明瞭ではない。

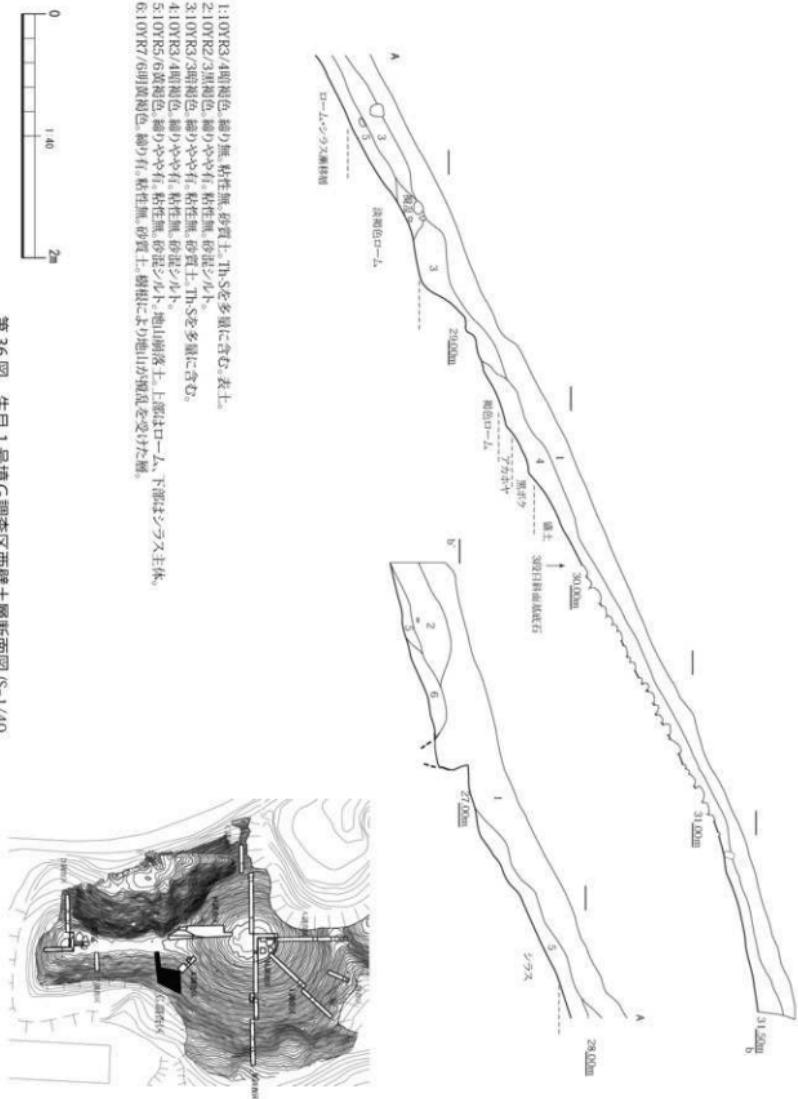
前方部墳頂平坦面 墳頂平坦面は肩口付近を検出したにとどまるが、H調査区の調査結果と同様に礫敷は検出されなかった。また、平坦面外縁端も流出によって失われており、角がやや丸みを帯びている。



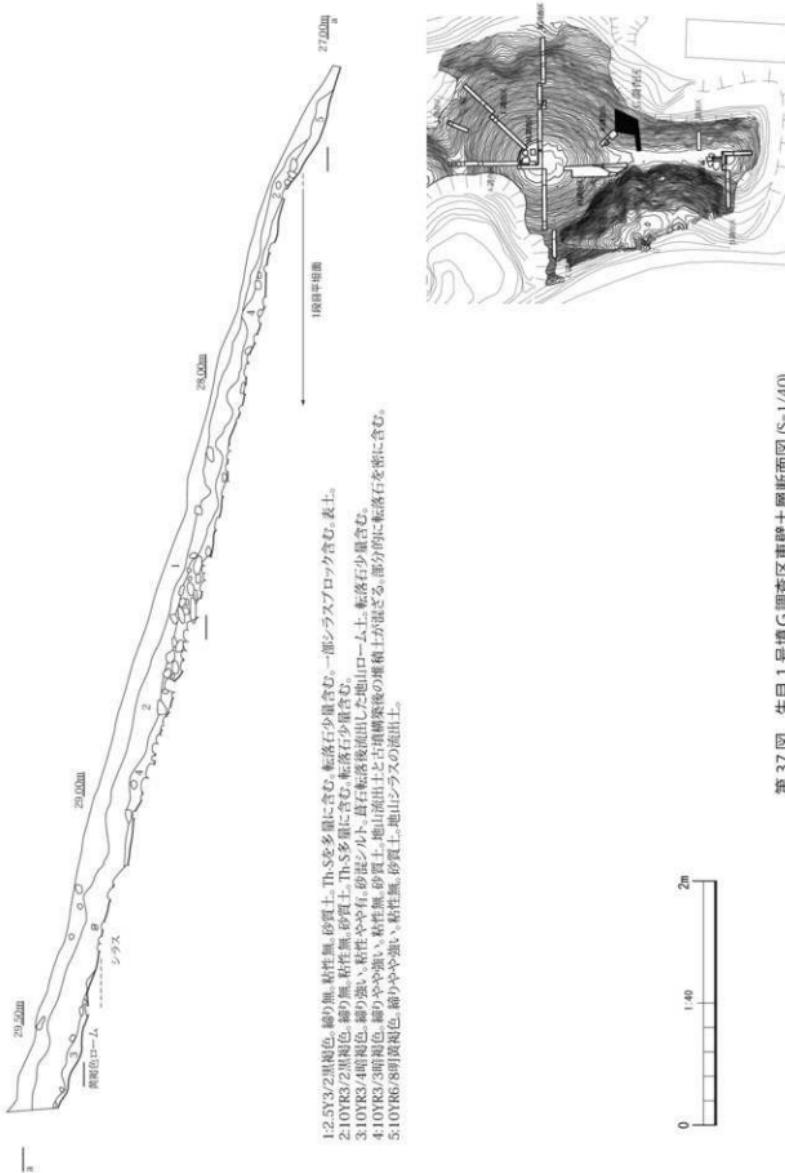
第34図 生目1号填G調査区平面図 (S=1/50)



第35図 生目1号墳G調査区立面図 (S=1/40)



第36図 生目1号墳G調査区西壁土層断面図 (S-1/40)



第37図 生目1号墳G調査区東壁土層断面図 (S=1/40)

(3) K調査区

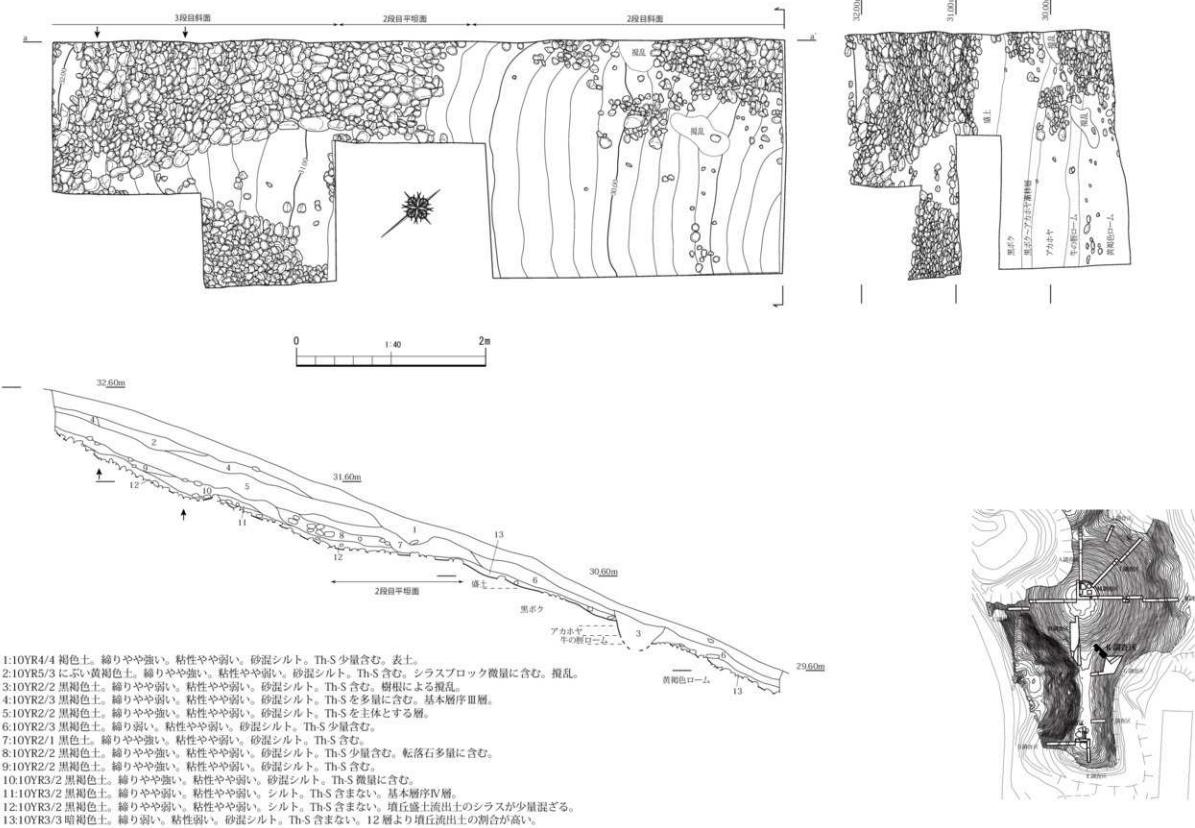
概要 G調査区で検出されたくびれ部を上位に延長し、墳頂平坦面までのくびれ部接続状況を明らかにすることを目的に設定した調査区である。調査区は、大径木を避け掘削をおこなったため不整形となっている。調査面積は 13.8 m²である。

調査の結果、2段目斜面から3段目斜面までのくびれ部の状況は明らかにできたが、墳頂平坦面に関しては、大径木に遮られ検出することができなかった。G調査区と同様、後円部では、斜面から葺石、平坦面から礫敷が検出されたが、前方部は2段目斜面において葺石が検出されなかった。また、後円部3段目斜面葺石と前方部3段目斜面葺石の間に三角形状の隙間が検出された。その検出状況から、築造当初より葺石が施されていなかった可能性が高い。

2段目斜面 前述のとおり、後円部は葺石が施されているが、前方部では未検出である。標高 29.6 m 付近で検出された礫は、縄文時代早期包含層中の礫と磨石である。後円部の葺石は、長径 15cm から 5cm 程度の礫を小口積みにするが、樹根等の攪乱により遺存状況は良くない。標高 30.6 m 付近で地山削り出しと盛土の境界が検出されている。地山の最上層は基本層序V 層の黒ボク土である。

2段目平坦面 外縁端が流出しているが、概ね本来の形状を保っていると思われる。幅は 1.4 m を測り、後円部側は長径 20cm から 5cm の礫を平置きに敷き詰めている。後円部と前方部の境界を示す区画石列が明瞭に確認できる。前方部側は大径木に遮られほとんど調査することができなかつたが、調査範囲からみると礫敷が施されていた可能性がある。

3段目斜面 後円部側は基底石から斜度 22° の傾斜角で立ち上がる。基底石は南東壁側で 3 石、長径 25cm 程度の礫を縱置きにしている。他の調査区では確認されておらず、特徴的な配置である。基底石を縱に配置する事例は、五塙原古墳、玉手山 7 号墳、豊前石塚山古墳、渋谷向山古墳など前期古墳において確認されており、廣瀬覚氏の B 2 類（廣瀬 2008、2011）に該当する。ただし前述の諸古墳と比較すると、立ち上がりの角度が非常に緩く、大振りの石を基底石に使用しているように見せるための視覚的な効果は低い。また、本調査区の後円部においては、基底石から上部に積み上げていくという施工方法ではなく、前述した後円部と前方部を区画する石列を基礎として後円部上方へ斜めに積み上げていく施工方法を採用している。後円部の葺石に使用される礫は長径 25cm から 5cm 程度でばらつきが見られ、積み方もやや粗雑である。一方、前方部3段目斜面は、長径 10cm 程度の礫を小口積みで密に積み上げている。前述の葺石未施工部分は、縦に長い三角形状を呈し、後円部と前方部の各々が区画石列で空間を区画している。生目 22 号墳では、後円部の葺石、礫敷の上に前方部の葺石、礫敷が一部覆い被さるような状況が検出されている（平成 28 年度調査、未報告）。また、中山大塚古墳や森將軍塚古墳など、後円部の葺石が前方部の葺石によって覆われている事例が散見されることから、後円部と前方部の葺石が接する箇所の葺石施工が、くびれ部で最終段階におこなわれていることが明らかである。さらにその施工方法は、前方部側の葺石が後円部側の葺石を覆う形となることが基本と思われる。つまり本墳ではその最終段階の工程をおこなっていないために、後円部葺石と前方部葺石の間に隙間が生じたと考えられる。前述の 22 号墳の調査成果も加味し、この隙間は本来は作業道であり、作業終了と共に閉じられるものと想定している。



第38図 生目1号墳K調査区平面図、立面図、土層断面図 (S=1/40)

第5項 前方部の調査成果

(1) D調査区

概要 前方部北側側面の形状が唯一保たれていると想定された箇所に、墳丘主軸に直交する形で設定した調査区である。墳頂部分でE調査区と結合する。大径木を避けるため、墳頂平坦面の端部付近で平行移動し設定した。調査面積は29.7m²である。

調査の結果、遺存状況は悪いものの、1段目斜面から墳頂平坦面までの各斜面、平坦面を検出した。葺石、礫敷は後円部側を中心に遺存していたが、これは施工単位が異なるため、前方部前面側の施工単位が流出したためである。詳細は後述するが、墳丘盛土出土内から弥生土器器台(7)が、Th-S含有土から須恵器無蓋高杯(9)が出土した。

1段目斜面 1段目斜面は一部に葺石が遺存するが大部分は崩落し失われている。特に斜面下位は土層の堆積状況から中世以降に大きく改変を受けたことが明らかである。標高27.7m付近で地山削り出しと盛土の境界を検出した。地山は黄褐色ローム層で、より上位に位置する牛の脛ローム層、アカホヤ火山灰層、黒ボク土層は検出されなかつた。葺石は長径15cm程度の礫を斜面に対し垂直に配置しているが、遺存する葺石も大部分は斜面下方に向け迫り出しており、本来の状況ではない。

1段目平坦面 流出が著しく外縁端は失われており、本来の幅は明らかではない。また、斜度9°を測り、後円部で検出した1段目平坦面より傾斜がある。平坦面上には遺存状況は良くないが、長径10cm程度の礫が敷設されている。

2段目斜面 1段目平坦面から斜度28°で立ち上がる。基底石は1石のみ検出された。大きさは長径20cm程度と斜面に積まれる葺石と大差ないが、横置きに配置される。そこより上位の葺石は斜面に対して垂直に小口積みされる。

2段目平坦面 1段目平坦面と同様に流出によって外縁端は失われている。斜度10°を測り、後円部2段目平坦面より傾斜がある。平坦面上には長径20cm程度の礫が敷設されている。

3段目斜面 2段目平坦面から斜度21°で立ち上がる。基底石は3石検出されたが、1石のみ横置きに配置される。大きさは長径15cm程度であるが、そこより上位の葺石が長径10cm程度であるため判別は容易である。葺石は後円部と同様に、斜面に対し垂直に打ち込むように積み上げられている状況が確認できる。

墳頂平坦面 前方部墳頂平坦面は、H調査区と同様、礫敷は検出されなかつた。調査区の東側で黒色土を埋土とする落ち込みが検出された。埋葬施設の可能性も想定されたためL調査区を設定し、平面プランを確認することにした。この落ち込みに関しては、L調査区において詳述することにする。

(2) E調査区

概要 前方部前面に墳丘主軸に沿って設定するはずであったが、大径木が存在したためそれを避け、前面斜面の遺存状態がよい南側にずらし設定した。調査面積は14.2m²である。

調査の結果、葺石は検出されず、表土直下に墳丘出土が堆積している状況であった。墳丘面の傾斜角は斜度22°である。30.4m付近で地山削り出しと盛土の境界が検出された。地山の最上位層はシラスと黄褐色ローム層の漸移層で、黄褐色ローム層より上位の層は検出されな

かった。標高 30.4 m付近において小平坦面を成す傾斜変換点がみられる。D調査区で検出された2段目平坦面が標高 30.2 mと近似値であることから、この傾斜変換点が2段目平坦面の可能性が高い。ただし、墳丘面上に堆積している土は墳丘出土土と表土のみであり、土層の堆積状況からこの傾斜変換点が2段目平坦面であるということを確定することは難しい。また、前述のような堆積状況のため、葺石がない検出状況が本来的なものか否かを判断することも困難である。

(3) F調査区

概要 前方部右側面に墳丘主軸に直交する形で設定した調査区である。前方部側面の段築状況を確認することを目的とした。調査面積は 9.8 m²である。

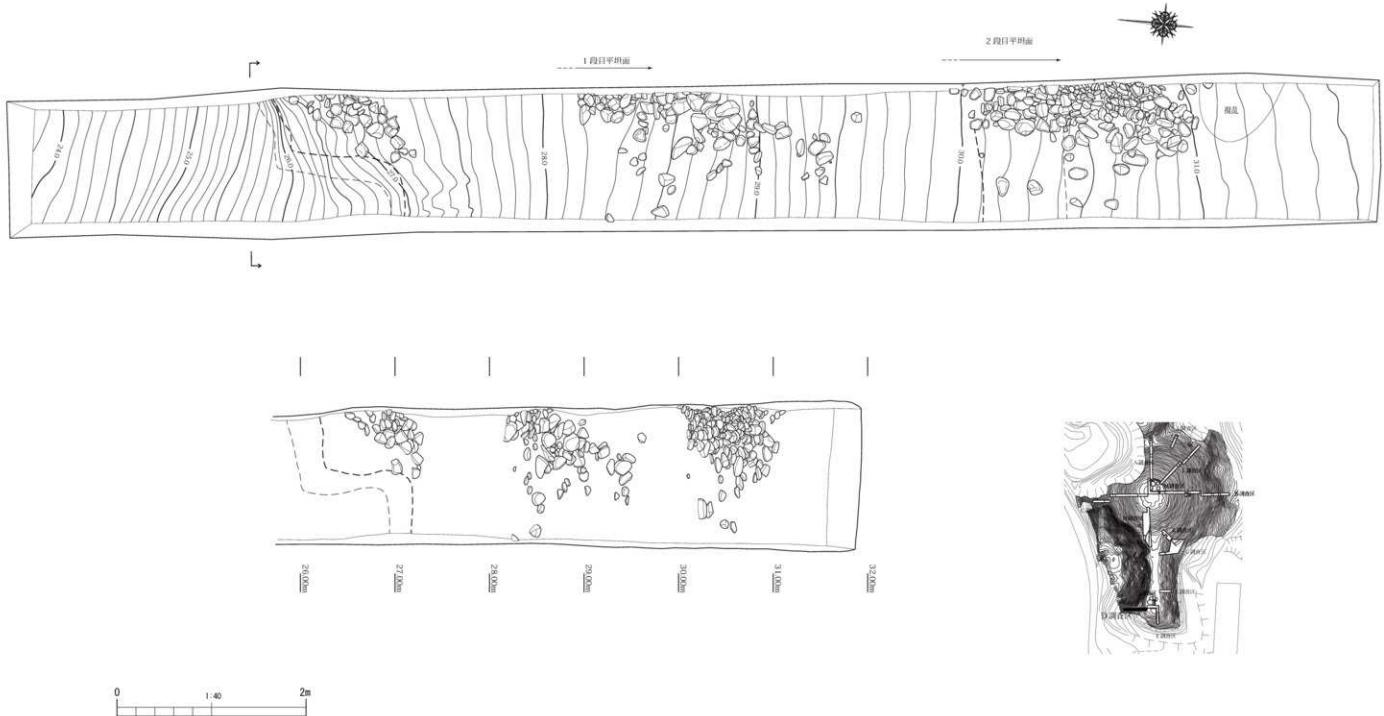
調査の結果、墳丘斜面は流出が著しく、段築など本来の形状を保っていないことが明らかになった。調査区内で検出された墳丘面はすべてシラス主体の盛土で、場所によってシラスブロックの密度や色調が異なる。同じく前方部南側斜面に設定したG調査区では、標高 30 m付近で地山と盛土の境界が検出されているが、F調査区では標高 29 m付近においても検出されるのは盛土である。これらのことから、F調査区の位置は、墳丘の基盤となる地山の尾根が細く、地山削りだしのみで墳丘下位の形状を作出することができなかつたため、地山を被覆するような形で盛土を施し、墳丘を形造っていると考えられる。そのため墳丘表面に現れる地山盛土境界は、更に下位で検出されることになると思われる。

葺石は転落石も含め検出されていないが、墳頂付近において径 5cm 以下の礫が点在する状況で検出された。調査区壁に掛かっているため礫の全体的な広がりは不明である。その他の各調査区の結果から、前方部墳頂には礫が敷設されていないと考えられる。検出された礫は古墳築造時に前方部墳頂に敷設されたものではなく、古墳築造以後に帰属するものと想定される。Th-S 含有土直下での検出のため、後述する L 調査区、D 調査区で確認された土坑に関連するものの可能性もある。

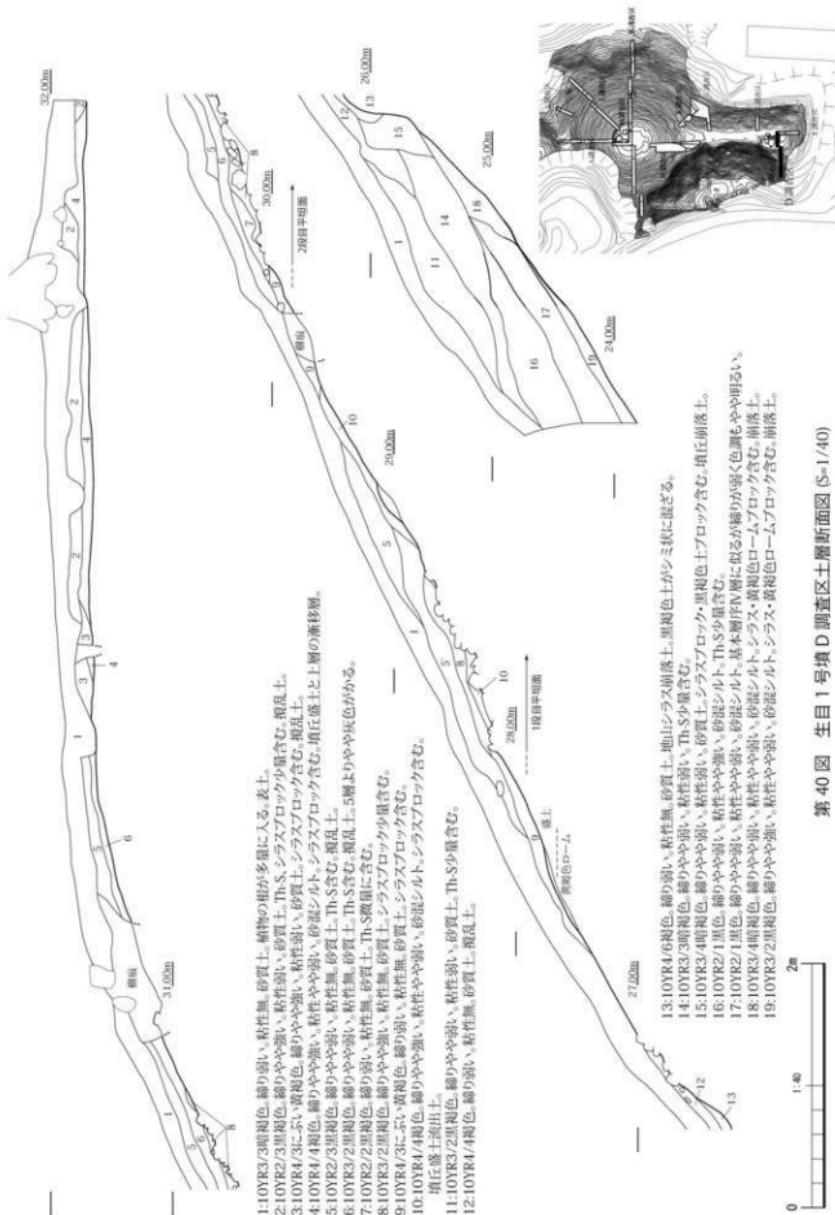
(4) L調査区

概要 D調査区の前方部墳頂で検出された落ち込みの広がりを確認するために設定した調査区である。南北方向の落ち込み幅と、落ち込み西端部はD調査区において確認できていたため、落ち込みの東端を検出することを目的とし、墳丘主軸に平行する形で調査区を設定した。調査面積は 7.9 m²である。

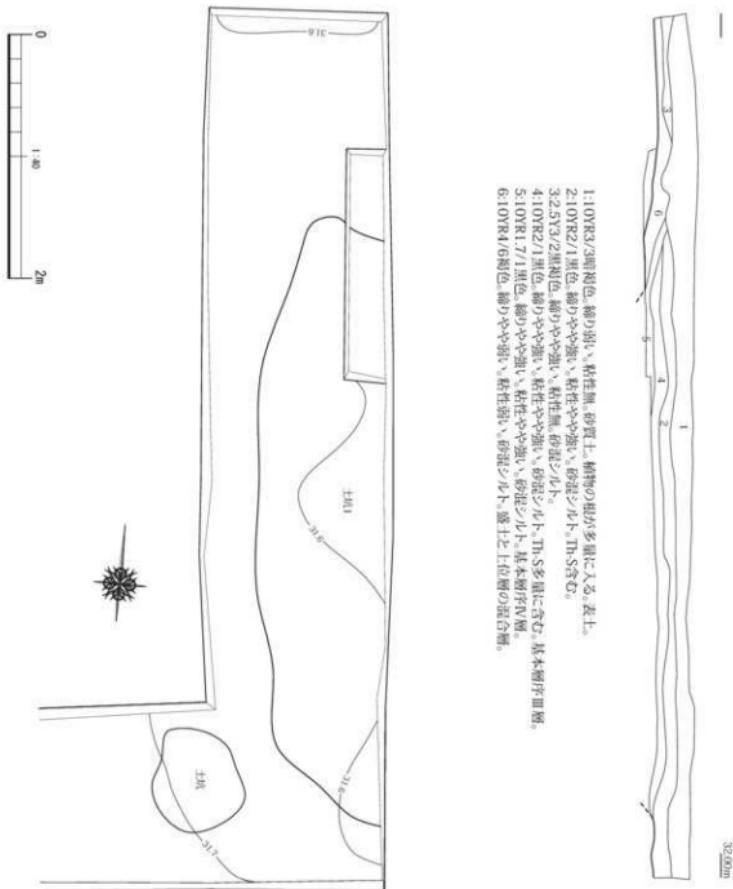
調査の結果、落ち込みの東端を検出した。平面形は歪な隅丸三角形で、1辺約 5 mになると思われる。当初は平面検出で止める計画であったが、平面形が歪な形状であり、埋葬施設の可能性が低くなったことから、サブトレーナにより一部を掘り下げ、掘削時期や性格を明らかにすることを試みた。深さ 0.3 mまで掘り下げたところ、底面であるシラス主体の盛土が検出された。断面形状は皿状を呈し、土層の堆積はレンズ状の自然堆積で中位まで Th-S を含む。検出は墳丘盛土面からの掘り込みであるが、前述の土層堆積から Th-S 含有の黒ボク土が堆積する段階では下層部分しか埋没していない状況であることから、1号墳に伴うものではなく Th-S 降灰墳に掘り込まれた土坑であると判断される。遺物も出土しなかつたことから性格は不明である。



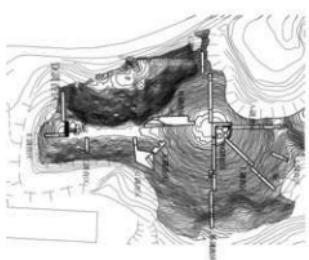
第39図 生目1号墳D調査区斜面部平面図、立面図(S=1/40)

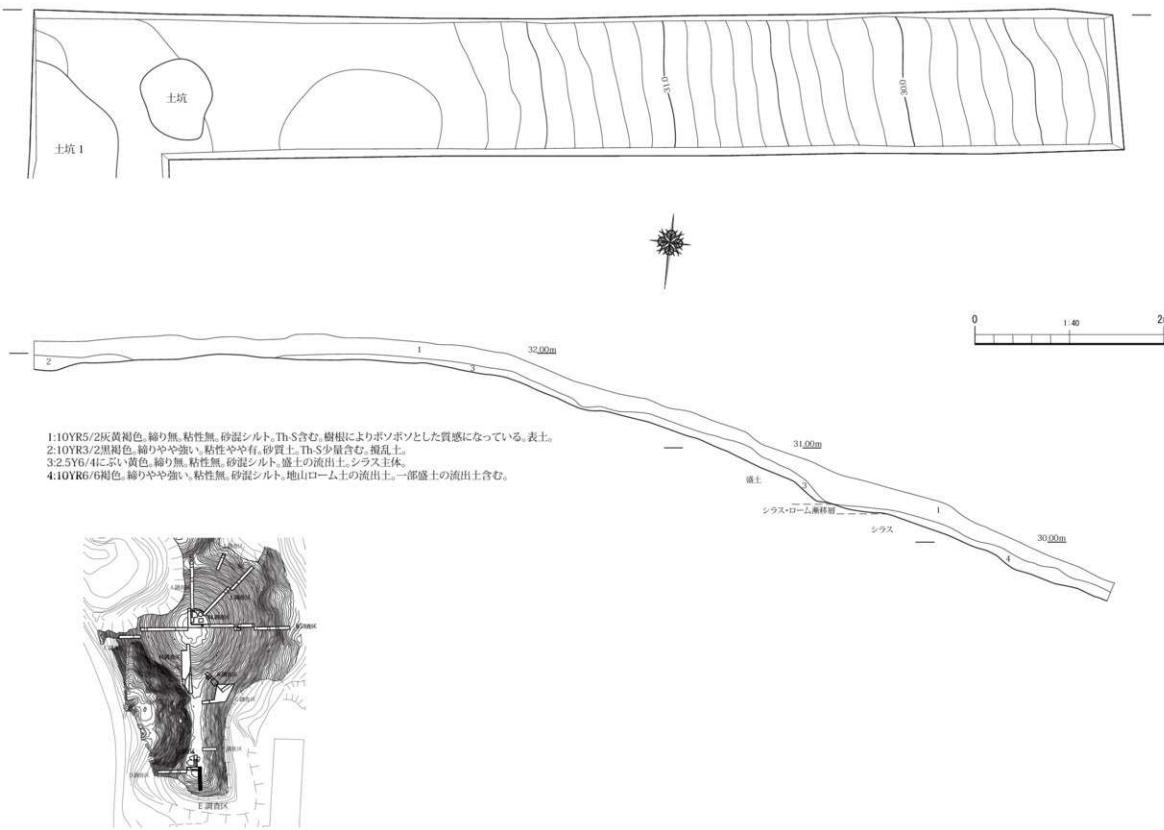


第40図 生目1号墳D調査区土層断面図 (S=1/40)

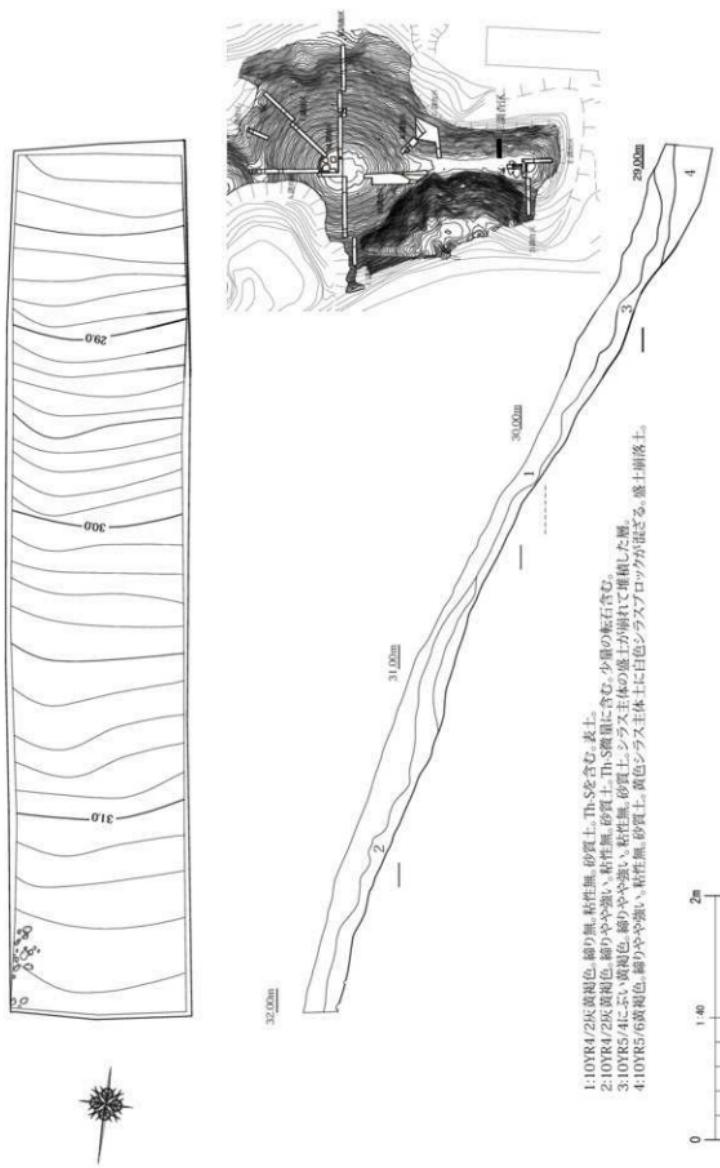


第41図 生目1号墳D 調査区塊頂部平面図、断面図(S-1/40)

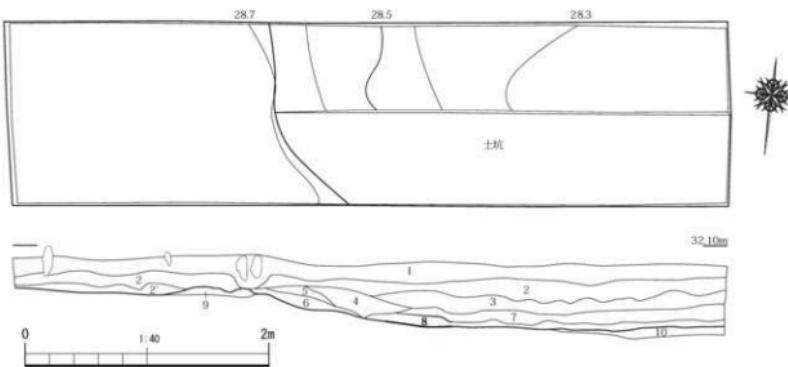




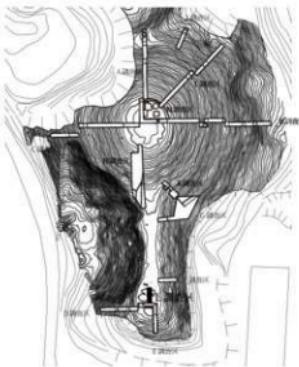
第 42 図 生目 1 号墳 E 調査区平面図、立面図、断面図 (S=1/40)



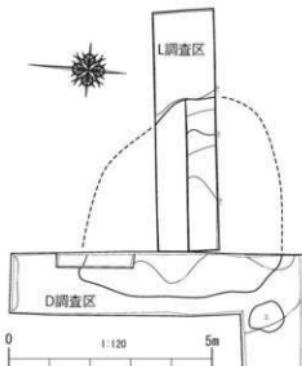
第43図 生目1号墳F調査区平面図、断面図 (S-1/40)



- 1:10YR4/3にぶい黄褐色。繊り弱い。粘性弱い。砂質土。
Th-S含む。植物の根の影響によりボソボソとした質感。表土。
2:10YR3/2黒褐色。繊りやや強い。粘性弱い。砂混シルト。
Th-S多量に含む。2'2に墳丘盛土のシラスが混ざる。
3:10YR2/1黒色。繊りやや強い。粘性やや弱い。砂混シルト。
Th-S含む(上位ほど多い)。
4:7.5YR3/2黒褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。
Th-S少量含む。
5:10YR4/3にぶい黄褐色。繊り弱い。粘性弱い。砂混シルト。
Th-S少量含む。
6:10YR5/3にぶい黄褐色。繊り弱い。粘性弱い。砂混シルト。
Th-S少量含む。5層と墳丘盛土の漸移層。
7:10YR2/2黒褐色。繊りやや強い。粘性やや弱い。
8:10YR3/2黒褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。
4層と9層(墳丘盛土)の漸移層。
9:10YR4/3にぶい黄褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂混シルト。
墳丘盛土。
10:10YR7/4にぶい黄褐色。繊りやや弱い。粘性弱い。砂質土。
墳丘盛土(シラス主体上)。



第44図 生目1号墳L調査区平面図、断面図 (S=1/40)

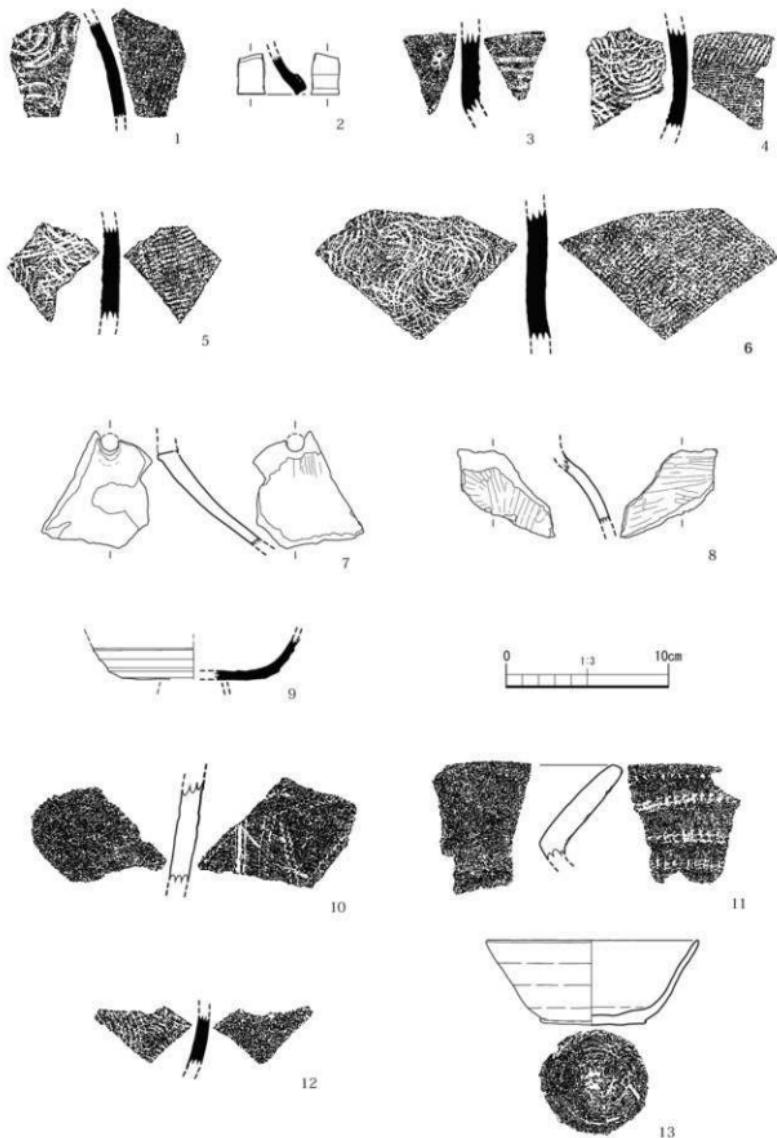


第45図 生目1号墳土坑1平面図 (S=1/120)

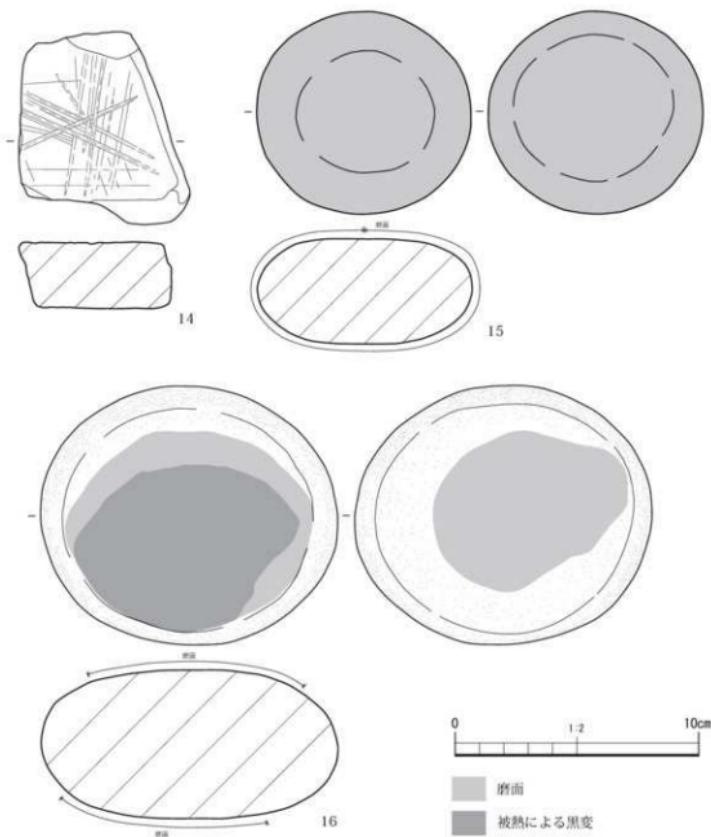
第6項 生目1号墳出土遺物

1号墳は3ヶ年で計508m²にわたって発掘調査をおこなったが、出土遺物は非常に僅少である。

1は後円部墳頂のTh-S含有層から出土した須恵器片である。肩部付近と思われるが傾きは不明である。2から6はB調査区南墳丘外から出土した須恵器である。2は短脚の高壺脚部である。3は壺口縁部の立ち上がり付近であるが傾きは不明である。4から6は壺胴部である。7から11は前方部から出土した遺物である。7、8は墳丘流出土から出土した弥生土器である。7は器台の脚部、8は壺肩部である。8は内外面ミガキ調整である。



第46図 生目1号墳出土遺物実測図① ($S=1/3$)



第47図 生目1号墳出土遺物実測図② (S-1/2)

9はTh-S含有土から出土した須恵器無蓋高杯である。10、11は縄文土器深鉢である。10は下剥峯式土器、11は塞ノ神B式土器である。12はI調査区2段目平坦面上の黒ボク層土から出土した須恵器である。13はI調査区柴研堀から出土した土師器壺で底部はヘラ切り底である。14は転落石内に混入していた砂岩製砥石である。古墳時代以前の所産と思われ、葺石に転用されていたものが転落したものと想定される。15、16はK調査区から出土した磨石である。墳丘地山削り出し部に2個体揃って露出していた。検出層位は縄文時代早期遺物包含層に相当する黄褐色ローム層であることから当該期に属する遺物で、出土状況から埋納されていた可能性が高い。その他、1号墳に伴う可能性が高い遺物として、後円部墳頂礫敷き直上から土師器片が出土しているものの、細片のため器種や部位も判別できない。